
たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！

【Nコード】

N7411P

【作者名】

龍の骨

【あらすじ】

ハリウッドスターの夢を見る小学生竜崎たけし。ある日の下校時に、空き地で銅鏡を見つける。すると銅鏡は光だし、たけしを包む気が付けば黒い空間の中におり、目の前には北郷一刀という青年に『全世界の支配を企むデビル帝国より早く散らばったクリスタルを集めてほしい』と外史に飛ばされてしまう。外史の中でクリスタルを集める旅が、始まった。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

主人公設定

竜崎たけし

イメージＣＶ 小林由美子

特徴 背は鈴々と同じで、髪はツンツンしている。顔は『メタルファイトベイブレード』の鋼銀河似である。

性格 元気で明るいが、生意気な所がある。

本編の主人公。小学四年生である。将来の夢はハリウッドのアクションスターになること。その為、空手と器械体操を習っている。趣味はアクション映画の鑑賞。トリッキーな戦いが得意。

モビルクリスタル

たけしが北郷一刀からもらったクリスタル。色は青であり、モビルアームズを発動することができる。

モビルアームズ

モビルクリスタルを発動させたオーレンジャーロボをモデルとした鎧である。『モビルアームズ発動!』と言い、モビルクリスタルを空にかざせば発動する。

超力タケシ

モビルアームズを装着したたけしの姿である。たけしの意味でヘツドを変える事ができる。武器はスーパークラウンソード、必殺技は『クラウンファイナルクラッシュ』である。

主人公設定（後書き）

次回は本編です。

クリスタル1 いざっ！三国志の世界へ！（前書き）

イメージOP『flower of bravery』
イメージED『緊急発進！オーレンジャー』

これをイメージして読めば楽しいですよ。

たけし

「さあ！本編が始まるぞ！」

クリスタル1 いざっ！三国志の世界へ！

中国の幽州あたりの荒野、そこには、一人の少年が気絶している。

少年は起き上がり、周りを見渡す。

たけし

「あれ？ここって、俺がいた世界とは違う・・・」

少年の名は竜崎たけし。どうやら違う世界に動揺しているようだ。

たけし

「何で俺はここにいるんだろう？」

たけしはどうして荒野にいるのかを、思い出す。

それは一時間前の事だった・・・

たけしはいつものように元気よく下校する。

そして、空き地を通りすぎる所で、銅鏡らしき鏡に気づき、空き地に入る。

たけし

「うわぁ、なんだこれ？」

不思議そうに鏡を拾い上げる。その時だった。

ギョオーーーーー・・・

突然鏡が光だし、たけしを吸い込もうとする。

たけし

「な、何だ！？吸い込まれ……うわぁ—————！！！」

たけしは鏡に吸い込まれてしまった。

そして気がつくと、たけしは暗い世界にいた。

目の前には、高校生くらいの男性がいた。

たけし

「お前は誰だ？」

たけしは男性に尋ねる。

男性

「俺は北郷一刀、竜崎たけし、お前を待っていた」

たけし

「俺を？」

一刀

「そうだ。俺はお前を待っていた。頼みだが、俺のいた世界に散らばったクリスタルを回収してほしい」

これを聞いたたけしは……

たけし

「か、回収って・・・散らばったクリスタルがどこにあるか解らないんじゃない意味がねえよ」

一刀

「それは俺がいた世界で旅をすれば、クリスタルは現れる」

するとたけしは・・・

たけし

「どうしてクリスタルを回収させるんだ？」

と尋ねる。

一刀

「クリスタルを回収してほしい理由は、悪魔が住む帝国、デビル悪魔帝国がクリスタルを使って世界を支配しようとしている。そうなる前にお前に回収してほしいんだ」

たけし

「なるほどー」

一刀

「これをお前にやる」

一刀が手に持っているのは、青いクリスタルだった。

そのクリスタルをたけしに渡す。

たけし

「これは？」

一刀

「それはお前に役立つだろう」

すると光がたけしを包み込もうとする。

たけし

「ちょ！待てよ！これどうやって・・・」

一刀

「健闘を祈る」

たけし

「ちよつと！うわぁーーーー！！！」

こうして、たけしは光に包まれた。

そして気がつくと、幽州あたりの荒野に気絶したという。

たけし

「そうか、あの一刀というやつに・・・そうだ！クリスタルは・・・」

たけしはジープンのポケットに手を入れ、青いクリスタルを取り出す。

たけし

「やっぱり・・・でもただのクリスタルだよな！」

たけしの向こうから、三人の少女が現れた。

????

「愛紗ちゃん、あれが流れ星が落ちた場所じゃない？」

????

「桃香様！危険です！もしかしたら妖あやかかもしれません」

????

「もしかして愛紗、怖いのか？」

????

「なっ！鈴々！そんなことはないぞ！」

一人目は桃色の髪で、高校生くらいの少女であり、二人目は黒髪のポニーテールで龍の形？をした槍を持った少女であり、

三人目はトラバッジをつけた蛇状の槍を持った少女である。

たけし

「何だあ？変な格好してるなあ」

と不思議そうに見るたけしであった。

????

「あれ？男の子かな」

少女はたけしに近づく

????

「桃香様！こやつは子供に化けた妖かもしれませんぞ！」

「???」

「そうには見えないのだ」

「???」

「鈴々！」

たけし

「あのさあ、何なの？」

たけしが声をかけると、三人の少女はたけしに向く。

「???」

「あれ？君が天の御遣い？」

たけしは首を傾げる。

たけし

「天の遣い？何だそりゃ？」

「???」

「占い師の管輅ちゃんの預言で『乱世おとずれし時天から武人が現れる』ってね」

これを聞いて驚くたけし。

たけし

「ちよつと待てよ！俺はそんなんじゃないし、っていうか、俺がそんな力があつたら、十秒でこの世を正してるよ！」

???

「そ、そうなの？」

たけし

「ところでさあ、君達誰？俺は竜崎たけしだ」

たけしは三人の少女に尋ね、自分の名を名乗る。

???

「私は劉備、字は玄德」

???

「我が名は関羽、字は雲長」

???

「鈴々は張飛なのだ！」

たけし

「へえ、かつこいい名前だね。特に関羽と張飛が英雄になりそう」

関羽

「そ、そうか？」

張飛

「にやはは、誉められると照れちゃうのだ」

劉備

「竜崎君にお願いなんだけど、私達と乱世を止めるのを手伝ってほしいの」

しかしたけしは表情を変え、こつ答える。

たけし

「残念だけど、それは無理だ。それより大事な使命があるんだ！」

愛紗

「ほう、どんな使命だ？」

たけし

「それは……」

???

「ほう、その理由はこの世界に散らばったクリスタルを回収する事なんだな」

たけしの目の前には、バーロ兵を黒くした戦闘員を率いた青年がいた。

その戦闘員は『クロデビ』である。

そして関羽と張飛は、武器を構える。

たけし

「お前達は何なんだ！」

???

「我らはデビル帝国の守護隊、そして私は隊長のクリナーだ」

たけし

「デビル帝国、そうか、お前達もクリスタルを！」

クリナーレ

「そう言う事だ、貴様が持っているモビルクリスタルを渡してもらおうか？」

たけし

「モビルクリスタル！？」

そう言って青いクリスタルをポケットから出すたけし。

クリナーレ

「超力パワーを秘めた青いクリスタルの事だ」

たけしは青いクリスタルを自分の後ろに隠す。

たけし

「簡単に渡すかよ！」

クリナーレ

「そうか、ならば仕方がない」

するとクリナーレは、南海霸王を黒くした剣を取り出す。

クリナーレ

「このダークソードの餌食にしてやる」

そう言って、たけし達にゆっくり近づく。

その時……

空から一直線の光が、青いクリスタルに降ってくる。そして光は、青いクリスタルに当たる。

たけし

（何だ、この感じは、まるで力が湧いてくる）

そしてたけしは、青いクリスタルを空にかざす。

クリナーレ

「何のマネだ」

たけし

「モビルアームズ！発動！」

そして青いクリスタルは光だし、オーレンジャーロボにそっくりな鎧に変わり、たけしに装着する。

たけしは気合いで光を晴らす。

クリナーレ

「その姿は……」

???

「超力タケシ！オーレ！」

超力タケシの姿に驚くクリナーレと劉備達。

劉備

「す、すごい……」

関羽

「と、桃香様の言う通りだったのか……」

張飛

「すごい！かっこいいのだ！」

クリナーレ

「超力パワーの力を引き出せた程度で、デビル帝国に勝てると思うな！クロデビ！」

そしてクリナーレの後ろにいるクロデビ達は超力タケシに向かって走る。

超力タケシは、クロデビに立ち向かうのであった。

クリスタル1 いざっ！三国志の世界へ！（後書き）

たけし

「どうだった？次回は超力タケシとクリナーレのバトル！つついでに残念な子？が出るぜ！」

感想と質問をお待ちしております。

クリスタル2 たけし旅立つ！（前書き）

今回はヘッドチェンジします。

たけし

「どんな事だあ？」

クリスタル2 たけし旅立つ！

クロデビ達に立ち向かう超力タケシ、クロデビ達は超力タケシに攻撃を仕掛けるが、かわされる。

そして超力タケシは、体術を駆してクロデビ達を倒していく。

超力タケシによってクロデビ達の数は一半になった。

クリナーレ

「成る程、お前の身体能力とクリスタルの力が一つになったって訳か」

超力タケシ

「どういう事だ！」

クリナーレ

「普通の人間ならクリスタルの力に吞まれるが、お前の場合、理性が保っていて、そしてクロデビと戦った時にクリスタルの力とお前の心が一つになったということさ」

超力タケシ

「そ、そうなのか、俺とモバイルクリスタルは一つになったってことだな」

クリナーレ

「しかし、その力は本当かどうか、白黒はつきりさせてやる」

クリナーレと超力タケシはゆっくり横移動をする。

そして超力タケシはクリナーレに走り、攻撃を仕掛けるが、かわされる。

クリナーレはダークソードの斬撃を喰らわすが、防がれる。

超力タケシ

「お前、剣を持ってるな」

クリナーレ

「だから何だ？」

超力タケシ

「俺も剣を持ってるぜ！」

するとウィングヘッドの額のマークが光だす。

超力タケシ

「スーパークラウンソード！」

超力タケシは、剣型の武器、スーパークラウンソードを取りだし、構える。

クリナーレ

「成る程、これが貴様の剣か、面白い」

クリナーレは攻撃を仕掛け、超力タケシはその攻撃を防ぐ。

超力タケシとクリナーレの剣が打ち合う。

この光景を見た劉備達は・・・

劉備

「やっぱり本当だったんだよ！」

関羽

「そうですね、あの戦いを見てしまった以上、信じるしかありません」

張飛

「でもあの二人はぶつかりっこしてるのだ」

向こうでは、二人の打ち合いが続いていた。

クリナーレ

「中々やるな！」

超力タケシ

「こう見えてもゲームで覚えたんだぜ！」

クリナーレ

「何？ゲームだと？」

そして超力タケシは、クリナーレを押し返す。

更に前蹴りをし、正拳突きを腹に当ててで倒す。

クリナーレ

「ぐっ！これは効いたな」

超力タケシ

「どうだ！俺が諦めない限り！お前らなんて怖くないのさ！」

クリナーレはダークソードを鞘に収める。

クリナーレ

「お前の力は大体解った。これにて失礼する」

クリナーレはクロデビと共に黒い霧に包まれ、消えた。

超力タケシ

「おい！待てよ！」

関羽

「お見事です、あの戦いっぷりを見た所で、あなたこそ天の御遣い
です」

超力タケシ

「へ？俺が？」

啞然としたと同時に変身が解かれる。

たけし

「あれ？元に戻っちゃった」

劉備

「すごいね、どんな事をしたの？」

劉備は目を輝かせながらたけしに聞く。

たけしはポケットからモビルクリスタルを取り出す。

たけし

「クリスタルの力だ、俺はこれで戦ったんだ」

関羽

「綺麗な物だな」

張飛

「綺麗なのだ」

たけし

（やっぱり、一刀って奴が言っていたクリスタルの力っていうのはこういう事なんだな）

そう思いながら、心に決心を持ったたけしであった。

たけし

「劉備さん、俺は手伝えない理由を聞いてくれ！」

劉備

「え？」

こうしてたけしは、一刀にこの世界に散らばったクリスタルを回収するように頼まれた事と、デビル帝国からの支配を阻止する事を説明した。

劉備

「そうなんだ、それで手伝えないって」

たけし

「すまねえ、でもこの世界がデビル帝国に支配されるのは最悪だ！
その前に俺が速くクリスタルを集めなきゃならない！」

関羽

「でも、お前一人で旅するのは危険だぞ」

たけし

「俺一人でいい、だから俺を旅に出してくれ！」

関羽

「だが……」

そこで劉備は止める。

劉備

「たけし君、行ってきなよ」

たけし

「劉備さん」

劉備

「そういう使命を背負っている事を知らなくてごめんね」

たけし

「じゃあ……」

劉備は笑顔で頷く。

たけし

「ありがとうございます！」

関羽

「たけしよ、お前の正義、見せてもらったぞ、褒美に、私達の真名を、お前に授ける」

たけし

「なあ、真名ってなんだ？」

と首を傾げる。

劉備

「真名というのはね、親しい同士が呼び会う名前という事なんだよ」

たけし

「へえ、そうなのか！」

劉備

「では、私は劉備、字は玄德。真名は桃香」

関羽

「我が名は関羽、字は雲長、真名は愛紗」

張飛

「鈴々 は張飛なのだ！そして真名は鈴々なのだ！」

たけし

「俺は竜崎たけし！真名は無いけどな」

それぞれ名を名乗った後、たけしは劉備達から離れる。

劉備

「たけしく〜ん！クリスタル集め頑張つてねえ〜！」

関羽

「そうだぞお〜！諦めたら私の青龍偃月刀で成敗するからなあ〜」

たけし

「解りましたあ〜それと桃香さんと愛紗さ〜ん、スカートの丈が少し短いから風邪ひくなよー！ー！ー！」

これを聞いた桃香と愛紗は赤くなる。

桃香

「もお〜それは大声で言わないでえ〜！」

そしてたけしは、桃香達から離れていくのであった。

たけし

「ふう、幽州からスタートかあ、そういえば桃香さんが言ってた幽州の太守、公孫賛は昔から友達だったよな、確か噂によると、影が薄いとか」

とある街の屋敷では・・・

公孫賛

「へつくしゅん！誰か私の噂をしているようだな」

このくしゃみをした赤い髪のポニーテールの少女、公孫賛である。

どうやら白馬を愛しているらしいが、影が薄い。

一方、たけしは……

たけし

「はあ、つと言っても地図ねえし、どうやって旅すりゃいいんだ？」

どうやら旅の事で悩んでいるようだ。

たけし

「そういえば、モビルクリスタルは、他のクリスタルを見つける効果があるんだよな、近づいたら光だすって一刀が言ってたな」

早速ポケットからモビルクリスタルを取り出す。

しかし反応は無い。

たけし

「反応してないってことはクリスタルはこの辺にはないな」

その時……

???

「それがモビルクリスタルか！」

たけしは何者かの声に気づき、その方向へ向く。

そこにはトカゲの怪人とクロデビ達だった。

たけし

「お前は誰だ！」

トカゲの怪人

「俺はデビル怪人のトカゲデビルだ！」

たけし

「トカゲデビル！？」

トカゲ

「クリナー様からお前からモビルクリスタルを奪ってこいと命じられてな、悪いがそのために死んでもらうぜ」

たけし

「ふざけるな！俺はお前らみたいな奴らのために死ぬわけにはいかないんだよ！」

そしてたけしはモビルクリスタルを空にかざす。

たけし

「モビルアームズ！発動！」

モビルクリスタルは光だし、モビルアームズに変わり、たけしに装着する。

たけしは気合いで光を晴らす。

トカゲデビル

「おいおい、なんだよお前！」

超力タケシ

「超力タケシ！オーレ！」

超力タケシに驚くトカゲデビル。

トカゲデビル

「こうなりや、行け！野郎共！」

クロデビ達は超力タケシに向かって走り出す。

超力タケシは向かって来たクロデビを一人ずつ倒していく。

クロデビ達は困もうとするが、動きを読まれ、倒される。

こうしてクロデビ達は全滅した。

トカゲデビル

「クソオ！」

トカゲデビルはやけになり、攻撃を仕掛けるが、かわされ、カウンターを喰らう。

超力タケシは更に攻撃を加え、最後にアッパーで吹き飛ばす。

トカゲデビル

「うう、お前え」

超力タケシ

「見たかトカゲデビル！これが俺とクリスタルの力だ！」

トカゲデビル

「畜生！これでも喰らえ！」

トカゲデビルは尻尾で攻撃し、超力タケシはダメージを受ける。

そして尻尾の攻撃を続ける。

だが超力タケシに捕まれ、投げ飛ばされる。

超力タケシ

「こうなったら！ウイングヘッドアウト！」

ウイングヘッドが外れ、トカゲデビルは驚く。

超力タケシ

「グラビトンヘッドチェンジ！」

グラビトンヘッドが、超力タケシの頭に装着する。

超力タケシ

「超力！レオンビーム！」

グラビトンヘッドの額から青いビームが発射し、トカゲデビルに当たる。

同時にトカゲデビルを宙に浮かしたり、落とそうとしたりという繰り返しをする。

そして上に浮かしたところでビームをやめ、トカゲデビルは落ちてしまい、ダメージを受ける。

超力タケシ

「とどめだ！グラビトンヘッドアウト！ウイングヘッドチェンジ！」

グラビトンヘッドが外れ、ウイングヘッドが装着する。

超力タケシ

「スーパークラウンソード！」

ウイングヘッドの額が光だし、スーパークラウンソードを取り出す。

超力タケシ

「クラウンファイナルクラッシュ！」

スーパークラウンソードが光だし、超力タケシはトカゲデビルを斬る。

トカゲデビル

「うわぁーーーーー！」

ドカアーーーーーン！

斬られたトカゲデビルは爆死した。

超力タケシ

「よし！バッチグーだぜ！」

その後、たけしは変身を解き、公孫贄が治めている街に向かった。

クリスタル2 たけし旅立つ！（後書き）

公孫賛

「おい！何だ！私の扱いは！」

いいじゃないか、アニメ版でもそうでしょ？

公孫賛

「だからってあの説明は無いだろう！」

次回もお楽しみに！

公孫賛

「無視するな！」

クリスタル3 クリナーレVSたけし！（前書き）

たけし

「ここで、一つ教えるぞ。俺が超力タケシになった時、身長が愛紗さんぐらいになるんだ」

低いんじゃないもんね。

たけし

「まあな、本編開始！」

クリスタル3 クリナーレVSたけし！

たけしが桃香達と別れてから三日後、街の食堂に居候して手伝いをしていた。

現在、皿洗いが終わったところだった。

たけし

「これでよしと！おばちゃん！皿洗い終わったぜ！」

おかみ

「いつもすまないねえ」

たけし

「そんな事ねえよ。俺はただ、食堂のお客さんの笑顔が見たいからさ」

おかみ

「そうかい、良い子だねえ」

たけし

「おばちゃん！次は何をすればいい？」

おかみ

「そうだねえ・・・」

こうしてたけしは、疲れるまで働いた。

デビル帝国の城『デビルキャッスル』では・・・

???

「そうなんだ、失敗したの?」

クリナーレ

「申し訳ございません」

その玉座に座っている魔王をイメージする服を着ている少年はカイザーデビル皇帝。

幼い体型をしている反面、傲慢で手段を選ばない冷酷な性格で、人間を道具としか見ない。

クリナーレはカイザーデビルの手下である。

カイザーデビル

「僕は早くクリスタルが欲しいんだよねえ、それに世界をデビル帝国の物にしるってパパに言われてねえ」

そう言っただけカイザーデビルは立ち上がり、クリナーレの顔を蹴り、踏みつける。

カイザーデビル

「あのさあ！うるさいよ！？僕は早くクリスタルを手にいれて世界を支配しなきゃいけないの！パパに怒られて追い出されたらどうすんのさ！？いい加減にしなよ！」

クリナーレ

「お、おやめ下さい！次こそは果たします！だからこの私にチャンス……」

するとカイザーデビルは、クリナーレの顔から自分の足をどける。

カイザーデビル

「じゃあ、成功したら許してあげる。ただし……失敗したら死刑だよ」

そしてカイザーデビルは、黒い笑みを浮かべる。

クリナーレ

「かしこまりました」

そしてクリナーレは黒い霧に包まれ、消える。

カイザーデビル

（竜崎たけしか……あいつがああ青いクリスタルを……）

そう思いながら黒いクリスタルを取りだして眺めるのであった。

一方、食堂では……

たけしはいつものように皿洗いをしていると……

入口から二人の兵士が入ってくる。

たけしは兵士が来た事に気付く。

兵士1

「君が天の御遣いか？」

たけし

「え？まあね」

兵士2

「一緒に来てもらう」

こうしてたけしは、兵士達と太守の屋敷へ向かった。

そして屋敷の入り口へ着いた。

たけし

「ここが太守の屋敷かあ？」

兵士1

「そうだ、では太守様を呼んでくるからそこで待っていてくれ」

兵士達は屋敷に入り、たけしは入り口で待っている。

たけしはモビルクリスタルを取り出した。

たけし

（クリスタルの力って、こんな程度じゃないかもしれない。多分恐ろしい力が秘めていると思う）

そう思いながらモビルクリスタルを見るたけしであった。

その時……

公孫賛

「天の御遣いが来たって？」

公孫賛が現れ、たけしは少し驚く。

たけし

（あれが桃香が言つてた公孫賛？名前はカッコいいと思って強くてゴツイ男だと思つた……）

公孫賛

「あれ？お前が天の御遣いか？」

そう言つてたけしを見る公孫賛。

たけしはこう答えた。

たけし

「ま、まあ一応……」

公孫賛

「一応つて……ところでお前は誰だ？」

たけし

「俺は竜崎たけし」

公孫賛

「竜崎というのか、私は公孫賛だ」

たけしは屋敷に入り、中庭に行った。

たけし

「ここが中庭かぁ、すげえよ」

とそこに……

???

「おや？公孫賛殿が言ってた天の御遣いという者だな」

青い髪をした槍を持っている女性が現れる。

たけし

「誰だ？俺は竜崎たけしだけど……」

???

「ほおう、たけしというのか、私は趙雲」

たけし

「趙雲、良い名前だな！」

趙雲

「そうか？」

そして公孫賛がきた後、たけしは二人に散らばったクリスタルを回収する事について話し、モビルクリスタルを見せたりした。

公孫賛

「成る程、その散らばったくりすたるっていう物を集めてどうするんだ？」

たけし

「ああ、少し長くなるかもしれないけど聞いてくれ。その理由は……」

回想

デビル帝国が外史に散らばったクリスタルを全て手に入れ、世界を支配する為に進軍する。

そして一年後、たけしがいた世界と外史が、デビル帝国によって支配されてしまう。

大勢の人がクロデビに囚われ、殺されたりする。

現実

たけし

「という訳なんだ。そうなる前にあいつらより早くクリスタルを集めなきゃならないんだ」

公孫賛

「そうか、そうなりたりしたら取り返しのつかない事になるな」

趙雲

「私も同じ意見だ」

たけし

「だから一人で旅をしようとしてたんだ」

すると公孫賛は……

公孫賛

「そうか、だったら竜崎に頼みがあるんだが」

たけし

「頼み？」

公孫賛は、山賊の隠れ家のシャクドウザンにあるのが確かなのだが、それらしき砦が見つからなく、困っていた。

そこで天の御遣い？であるたけしに頼もうと考えた事を話した。

たけし

「で、でもよ……俺のクリスタルは、他のクリスタルしか反応しない、それに砦とか見つけられないぞ」

趙雲

「それを使うとは言っていないが」

たけし

「そうなんだ……（汗）」

趙雲

「偽の隊商を仕立てて荷物に潜み、これをわざと賊に奪わせて隠れ家に忍び込む。これを賊自ら道案内させる」

たけし

「それってつまり、俺が荷物になれというのか？」

趙雲

「そうだ、ついでに私もだ」

たけしは冷や汗を流し、震える。

そして屋敷の入り口にて……

荷物を乗せた台車があり、たけしは台車にある箱の蓋を開ける。

たけし

「成る程、荷物になれってこういう事なんだな。しっかし狭いなあ、体と体でくっついちゃうぜ？もうちょっと広くしてくれって感じだよ」

趙雲

「そう言うな、私はくっついてても構わないが？」

たけし

「え？良いのか？触っちゃいけない所に当たっちゃうかもしれないぞ（汗）」

趙雲

「むしろ歓迎だ」

そしてたけしは冷や汗を流しながら箱に入り、趙雲はニヤニヤしながら箱に入る。

偽の隊商が荷物を乗せた台車を運びながらシャクドウ山の方へ行った。

すると賊が現れ、その台車は奪われる。台車を奪った賊はシャクドウ山の砦へ向かっている。

箱の中では……

たけし

（うう、やっぱり趙雲さんと一緒にいるとすっげえ恥ずかしい……
・男子として……）

趙雲

（おや？竜崎はこっついののは苦手か？）

たけし

（苦手も何も、俺は女子とこっついののはねえから……）

趙雲

（ふふふ、お主、顔が私の胸に当たってるぞ？）

たけし

「……………（気絶）」

たけしは趙雲の胸に自分の顔が当たっている所為か、気絶してしま
う。

そして荷物は皆のに着き、荷物とたけし達が入った箱は蔵庫に運ば
れる。

アニキ

「よし、また村の娘に酌をさせるか」

チビ

「今日は祝杯ですね」

デク

「あはは」

三人は蔵庫から出た。

そして箱の中から趙雲が蓋を開け、出てくる。

趙雲

「うまく忍び込めた、あれ？竜崎は？」

趙雲はたけしを探す、その下には気絶したまんまのたけしがいた。

趙雲

「いつまで気絶している」

趙雲はたけしを起こそうとする。

そしてたけしは趙雲に起こされ、一緒に蔵庫から出た。

通路では、滝のように涙を流すたけしと平然としている趙雲が歩いている。

たけし

「ううゝ俺もう結婚出来ねえかしんない（泣）」

趙雲

「別に私の胸に当たったくらいでそうなる訳じゃあるまい」

たけし

「趙雲さんはそうかもしれないけど俺にとってはそう思っただよ！」

おい、そう考えるのはまだ早いぞ（汗）

するとたけしは何かに気付いたのか、背を近くの壁につく。

そしてそこから何かを覗く。

それは……

祝杯をするかのように騒ぐ山賊達であった。

たけし

（あれが山賊？どう見ても五月蠅いだけの連中しか見えない）

そう思ったけしであった。

その時……

山賊達の前に、黒い霧が出る。

その霧が晴れ、そこにいるのはクリナーレだった。

たけし

「クリナーレ……何で……」

たけしはクリナーレが来た事に驚き、モビルクリスタルを取り出す。

そしてクリナーレの背後の地面からクロデビが現れる。

趙雲

「竜崎、あれは？」

たけし

「デビル帝国のクリナーレ、その後ろにいる奴等はクロデビだ」

趙雲

「そのクロデビというのは？」

たけし

「戦闘員だ、それを従わせてるのはクリナーレだ」

クリナーレは……

アニキ

「何だデメエ！」

チビ

「俺達の邪魔をしてただで済むと思ってんのか？」

デク

「だな」

クリナーレは少し笑い……

クリナーレ

「ふふふ、貴様らが私に手を出すということは死を意味をする。おとなしく降伏したほうが良いぞ？」

アニキ

「はん！そんなんで俺達がビビるとでも思ったか？」

クリナーレ

「試してみるか？」

そして山賊達はそれぞれ武器を構える。

たけし

「ダメだ、あいつには手を出しちゃいけない！」

そう言つてたけしは飛び降りる。

クリナーレと山賊は、たけしが着地する音に向く。

たけし

「その男から逃げろ！死にたくないのか！？」

アニキ

「はあ？何だこのガキ」

たけし

「今すぐ逃げろ！死ぬ前に！」

するとクリナーレはダークソードを抜き、構える。

アニキ

「ああん？」

クリナーレ

「ならば、見せてやる」

ダークソードが鞭状になり、クリナーレはそれを振り回し、周りが

傷ついたりする。

山賊達は驚き、怯える。

そしてクリナーレは笑いながら振り回す。

たけし

「やめろ！これ以上やるなら俺が許さねえ！」

クリナーレは止め、ダークソードを納める。

山賊達は武器を捨て、逃げる。

たけし

「クリナーレ、覚悟しろ！モビルアームズ発動！」

モビルクリスタルをかざし、モビルクリスタルはひかりだし、モビルアームズに変化する。

モビルアームズはたけしに装着し、たけしは気合いで光を晴らし、超力タケシになる。

超力タケシ

「超力タケシ！オーレ！」

上で見ている趙雲は驚く。

趙雲

（あれが、天の御遣いの力か……面白そうだな）

超力タケシ

「スーパークラウンソード！」

ウィングヘッドの額が光だし、右手にスーパークラウンソードを持ち、構える。

超力タケシ

「行くぞ！」

そして超力タケシは走り出し、クリナーレに攻撃を仕掛けるが、かわされる。

超力タケシは続けて攻撃するが、かわされる。

超力タケシ

「な、何で……」

クリナーレ

「お前は闇雲に突っ込んでいるだけだ、私の剣を見せてやる」

クリナーレは超力タケシに斬撃を喰らわす。

超力タケシはその斬撃を防ぐが、片足の膝を着いてしまう。

超力タケシ

（なんて力だ！まるで闇に押されてるようだ！）

クリナーレ

「貴様にこれを喰らわせてやろう」

ダークソードは鞭状になり、超力タケシに巻き付く。

クリナーレ

「ダークシヨック！」

ダークソードから黒い電気が超力タケシへ流れる。

超力タケシ

「うわぁーーーーーーー！！！」

超力タケシは黒い電気で苦しみ、倒れる。

クリナーレ

「所詮はこの程度か、くだらない。消してやる」

そしてクリナーレはダークソードを振り上げ、ダークソードが黒いオーラに包まれる。

クリナーレ

「死ね！超力タケシ！」

クリナーレはダークソードを降り下げるが……

超力タケシはスーパークラウンソードで防いだ。

クリナーレ

「何っ！？」

超力タケシ

「やだなあ、俺を侮っちゃダメだぜ？」

クリナーレは超力タケシの斬撃を喰らう。

超力タケシ

「今度は俺の番だ！」

そして超力タケシはスーパークラウンソードを構える。

超力タケシ

「クラウンファイナルクラッシュ！」

スーパークラウンソードが光だし、超力タケシはクリナーレに食らわす。

クリナーレ

「うわぁーーーーー！！！」

クラウンファイナルクラッシュを喰らったクリナーレは、傷を押さえる。

クリナーレ

「ぐっ、これで済んだと思うなよ！クロデビ！超力タケシを殺せ！！」

クロデビ達は超力タケシを囲み、超力タケシはクリナーレを探す。クリナーレはいなかった。

クロデビ達は超力タケシに襲いかかるが、超力タケシのスーパークラウンソードにやられる。

そして超力タケシはスーパークラウンソードでクロデビ達を蹴散らしていく。

趙雲

「あの数で蹴散らすとは、流石、竜崎だな」

超力タケシとクロデビ達の戦いを眺める趙雲であった。

超力タケシはクロデビ達を全て倒した後、変身を解き、山賊によって捕らわれた村の娘を救出した。

更にこの山で閉じ込められた子供達を助け、山に出た山賊達は公孫賛によって全滅した。

公孫賛の屋敷の入り口では……

公孫賛

「もう行くのか？」

たけし

「ああ、俺は散らばったクリスタルを早く集めないといけないからな」

公孫賛

「そうか、もう少しここにいて欲しいと思ったんだが」

たけし

「そうはいかねえよ、デビル帝国がクリスタルを集めようとしてるのに、俺も集めない訳にはいかねえよ伯佳さん」

公孫贊

「なら、戦に巻き込まないようにしろよ、それと、私の事は白蓮と呼んでくれ」

たけし

「解りました。そう呼ばせてもらいますよ」

趙雲

「そして私の事は星と呼んでもいいぞ」

たけし

「はい！呼ばせてもらいます！」

そしてたけしは、公孫贊と趙雲と別れ、村から出た。

その門の物陰では・・・

????

「うふふ、見つけたよ、竜崎君」

黒いロングヘアの少女が、たけしの後ろを見ていた。

クリスタル3 クリナーレVSたけし！（後書き）

たけし

「え！？次回はヒロイン登場！？」

そうだよ、問題あるか？

たけし

「別に問題は無いけど、どんなヒロインかなあ？楽しみだぜ！！」

そうかい、それと袁紹軍と曹操軍を出す。

たけし

「ええ！？どんな奴だ？俺より強いのか？」

慌てんな、次回もよろしくな。

クリスタル4 星の剣スターライザー！（前書き）

たけし

「ヒロインが登場するぞお！」

嬉しそうだな。

たけし

「いいじゃねえか！ヒロインがいなきゃ、物語は成立しないぜ！」

慌てるなって。

クリスタル4 星の剣スターライザー！

白蓮と別れてから3日経ち、もうすぐ街が見える頃であった。

しかしたけしは、暑そうに歩いていた。

たけし

「あ、暑い……あとちょいなのに……もう死にそう……」

たけしは、暑さに苦しそうな様子だった。

そして近くの木陰に座りこんだ。

たけし

「ふう、こりや大変だぜえ」

そう言いながら、寝転ぶ。

たけし

（少し休むか）

たけしは目をつむり、眠りに入る。

数分後、たけしは目を開けると、黒い空間にいた。

その目の前には、北郷一刀がいた。

一刀

「たけし……」

たけし

「ま、まさか一刀さん!？」

一刀

「そういえばお前、武器持っていないな」

たけし

「そ、そうだった……」

一刀

「だからお前の武器を届けに来た」

するとたけしの目の前に、赤い閃光が浮かぶ。

一刀

「これを手に取れ」

たけし

「お、おう」

赤い閃光を掴むと、剣に変わり、光が晴れる。

その剣には、星型のエンブレムがあった。

たけし

「な、何だこれ？」

一刀

「その剣はクリスタルの力が込められている。モビルクリスタルを発動させなくても、デビル帝国と戦える」

たけし

「でもさあ、モビルクリスタルを発動させねえと、デビル怪人には勝てない時があるんだよ」

一刀

「それがお前の弱点となる」

たけし

「え？どういう事？」

一刀

「旅をすれば解る」

そう言つて、たけしに背を向け、去っていった。

たけし

「おい！待てよ！」

そしてたけしは、一刀の後を追う。

たけし

「はっ！」

たけしは起き上がり、当たりを見渡す。

たけし

「夢、なのか……」

たけしは自分の右手を見ると、剣を握ってあった。

たけし

「夢じゃなかったのか……」

そしてたけしは歩こうとすると……

???

「たけしいくく!!」

後ろから声がしたことに気付き、振り向くと、黒いロングヘアでたけしと同じ歳の女の子が向かってくる。

女の子はたけしに跳びかかり、たけしは何とか持ち応えた。

たけし

「えつとおくどちらさまですか？」

???

「忘れたの？メイの事（涙目）」

するとたけしは、考える。

たけし

「もしかして、メイメイ!？」

メイメイ

「そうだよ! 幼馴染の!」

たけし

「どうしてここに!？」

メイメイ

「へ? なんとというか、変な鏡を見つけてね、それでね、鏡が光りだしてメイを吸い込ませたの! 気が付けば荒野に……………」

たけし

「だからか……………」

メイメイ

「それでね、メイの左腕にこんなのが着いてた」

メイメイの左腕には、丸型の鉄の盾だった。

たけし

「俺なんかこれだぞ？」

そしてたけしは剣を見せる。

メイメイ

「凄いよたけし! メイなんか……………」

メイメイは表情を暗くするが……………」

たけし

「そんな事言つなよ、盾だって武器だぜ？近接には向いているって」

メイメイ

「ほんと！？」

そう言つて、たけしに抱きついた。

そしてたけしは、頬を赤くする。

メイメイとたけしは、街に着くまで歩いた。

そして街に入り、歩いていた。

たけし

「へえゝ賑やかだなあゝ」

メイメイ

「そうだねゝ」

すると向こうから、馬に乗った金髪の少女が現れた。

その後ろには、赤色の服を着た女性と青色の服を着た女性が一匹ずつ馬に乗っており、兵士達が歩いていた。

たけし

「うひゃゝこりやすげゝなあゝ、馬に乗っているというのはゝ」

メイメイ

「そうだねゝ」

金髪の少女は、たけしの方へ向いた。

たけし

「こつち向いたぞ」

メイメイ

「へ？」

少女

「あなたが天の身遣いね」

たけし

「ま、まあな」

少女

「へえ、あなたの噂は聞いたわ。何か不思議な力を使っんでしょ？」

たけし

「！？つ、使うけど、必要以上に使わないぜ」

少女

「そう、私は曹孟徳、いずれまた会うときが来るわ」

そう言つて、曹操達が行った。

たけし

「曹、孟徳……」

メイメイ

「曹操だよ。字は孟徳、メイ達中国人にとっては英雄なの。三国志の主人公でもあるの。たしか、乱世の奸雄と呼ばれたの」

たけし

「じゃあ、あの女の子が……」

メイメイ

「数年には英雄になるんじゃないかな？」

たけし

「そうかあゝでも、赤色の服を着た女性と青色の服を着た女性は？」

メイメイ

「うゝん、赤は夏侯惇で青は夏侯淵じゃないかな？」

たけし

「へえゝ」

そしてたけしとメイメイは、食堂に行った。

たけし

「あれ？メイメイはどこ行ったんだ？」

メイメイがいない事に気付き、捜そうとするたけし。

とそこへ……

メイメイ

「お帰りなさいませゝご主人様ゝ」

メイド服姿のメイメイであつた。

これに啞然するたけし。

たけし

「それくどうしたの？」

メイメイ

「お金を稼ぐために、ここで働いてたの」

たけし

「それって……ダメじゃない？」

メイメイ

「何で？」

たけし

「だって、子供がバイトは禁止されているって先生が言つてたよ？」

するとメイメイは……

メイメイ

「この世界はね、乱れに乱れてるの。繰る返される戦争、賊によつて家族は壊され、勉強をしたくてもできない子供がいるんだよ」

たけし

「え……」

メイメイ

「だから、ここで働いてお金を稼ぐ子供だっている筈だよ……」

たけし

（そういえば……桃香さん達も乱世を止める手伝いをして欲しいって……俺は何でそれを断ったんだろう……）

メイメイ

「たけし？」

たけし

「悪い、炒飯を……」

メイメイ

「かしこまりました」

たけし

（村が賊に襲われても、役所は知らん振りしてたんだな……俺は桃香さん達の事に気付けば……そしてついていけば……）

心の中で後悔するたけしであった。

メイメイ

「お待たせしました」

そしてメイメイは炒飯を置く。

たけし

「ああ、ありがとう」

たけしは昼食をとった後、街を出歩く。

たけし

（こんなにも賑やかなのに、苦しむ人がいるなんて……確か
白蓮さんも言ってたな）

回想

屋敷の門にて……

白蓮

「この世は乱れに乱れている。村は賊に襲われ、苦しむ民がいるんだ」

たけし

「え？それって……」

白蓮

「お前も、旅をすれば解る。きっと……」

現実

たけし

（どうして……俺は間違ってたのか……）

するとそこへ……

兵士

「君か、噂の天の遣いというのは」

兵士2

「見たこともない服だな。間違いない」

たけし

「え？もしかして……」

兵士

「君を袁紹様の所へお連れする」

たけし

「え、袁紹！？」

そして兵士達はたけしを掴み、歩く。

たけし

「離せ！俺をどこへ連れてくつもりだ！」

兵士

「袁紹様の……屋敷だ」

こうしてたけしは、袁紹の屋敷に連れてかれ、玉座？の間にいた。

そこに座っているのは、袁紹である。

因みにその付近にいるのは、顔良と文醜である。

顔良の真名は斗詩で、文醜の真名は猪々子である。

たけし

「お前、袁紹っていうのか？」

袁紹

「この名族袁家の袁本初に向かって『お前』とは、失礼ですわね」

たけし

「名族か……俺に何の用だ」

袁紹

「私の領内で、暴れ回っている妖怪がしまして、兵では歯が立たないですの。そこで天の身遣いであるあなたに討伐を願いたいのですよ」

するとたけしは……

たけし

「俺がその妖怪を倒したら……」

袁紹

「勿論、私の配下になってもらいますわよ」

たけし

「ふざけんな！」

たけしの怒声により、袁紹は驚く。

袁紹

「な、何ですの!？」

たけし

「この世は乱れに乱れてるんだぞ！お前はここの領主なんだろう！さっきのアレは何だったんだ！」

袁紹

「あ、アレって？」

たけし

「俺は、あの曹孟徳っていう少女にあつたんだ。あれは何なんだ！」

袁紹

「そ、そうですね・・・あのクルクル小娘に賊の討伐を・・・」

たけし

「お前の領地は、自分で守れよ！人に頼るより！お前の街だって例え賑やかでも、苦しむ民はいるんだよ！」

そしてたけしは袁紹を睨む。

袁紹

「だ、だからなんだというんですの！」

たけし

「そいつを守らねえ奴は虫以下だ！」

これを聞いた袁紹は・・・

袁紹

「何ですって！？この私が虫以下ですって！？」

たけし

「何なら来いよ!」

袁紹

「猪々子!斗詩!やっしておしまいなさい!」

そしてたけしは、額に手を当てる。

すると赤い閃光が現れたけしは赤い閃光を掴み、剣に変えた。

たけし

「成る程、だつたら来いよ!」

たけしは二人を睨み、文醜と顔良はビビる。

文醜

「麗羽様、このガキ怖くて……………」

顔良

「それに、私達じゃ……………」

袁紹

「……………(汗)」

するとたけしは背を向ける。

たけし

「お前に頼まれなくても、妖怪は殺してやる。そして二度と俺に顔を合わせるな」

そう言つて、部屋から出た。

この時袁紹は……………

袁紹

（あの子供、只者じゃありませんわね）

と心に呟いた。

屋敷の外……………

メイメイ

「あ、たけし」

屋敷から出たたけしを迎えるメイメイ。

たけし

「メイメイ、この街から出るぞ」

メイメイ

「何で？」

たけし

「この街はこれ以上いられない。早く出よう」

たけしとメイメイは街の外へ出た。

そして街から離れた森へ入る。

たけし

「……………」

メイメイ

「どうしたの……………」

メイメイは話しかけるが、たけしは黙ったままである。

メイメイ

（何かあったのかな？）

そう思うメイメイ、その時……………

兵士達

「うわぁ————!!!!!!」

夏候惇

「こいつ!」

そこには、ドリル型の怪人によって吹き飛ばされた兵士達と、剣を構える夏候惇であった。

????

「このデビルドリラーに立ち向かうとは、何という無謀さ」

夏候惇

「貴様!馬鹿にしてるのか!」

デビルドリラー

「別にそういうつもりはない。それより、あの少年は何処だ!」

夏侯惇

「知らないと言っているだろお！」

デビルドリラー

「そうか、ならば……」

そしてデビルドリラーは、自分のドリルを回し、夏侯惇に向け、歩く。

デビルドリラー

「死ねえーーーー！！！」

その時、剣がデビルドリラーに飛んで来ており、デビルドリラーはよけ、剣は地面に刺さる。

デビルドリラー

「誰だ！」

たけし

「俺ならここにいるぜ！」

デビルドリラーが向くと、そこにはたけしとメイメイの姿がいた。

たけし

「さあて、いっちょやるか！」

デビルドリラー

「ふふふ、ようやく現れましたねえ〜クロデビ！」

デビルドリラーの前の地面からクロデビ達が現れ、メイメイは盾を

取り出す。

デビルドリラー

「行きなさい！」

クロデビ達はたけしとメイメイにかかり、たけしはクロデビ達の攻撃をかわし、攻撃する。

そしてメイメイは盾で攻撃し、更に盾を投げてクロデビ達を倒す。

盾はメイメイのところに戻ってくる。

一方たけしはクロデビ達を踏み台にし、地面に刺さっている剣を取り、構える。

デビルドリラー

「そ、それは星のクリスタルから生まれた『スターライザー』！」

たけし

「スターライザー……この剣が？」

デビルドリラー

「我等デビル帝国の皇帝様が滅ぼしたはず……」

たけし

「へえーじゃあ試してみるか！」

そしてたけしはスターライザーでクロデビ達を斬り、斬られたクロデビ達は消滅した。

たけしとメイメイによってクロデビ達は滅び、残っているのはデビルドリラーである。

デビルドリラー

「な、何という事だ……多数のクロデビ達を倒すなんて……」

たけし

「残るはテメエだけだ。観念しな」

デビルドリラー

「こうなったら！」

自分のドリルを回し、たけしに向けた。

するとドリルが高速回転し、更には強風を起こしてしまう。

たけし

「うう……なんて風なんだ！」

デビルドリラー

「はっはっはっはっは。私の風を受けた気分はどうです？」

たけし

「っ、強い……」

強い風を受け、もうダメかと思いきや……

メイメイ

「えい！」

メイメイはデビルドリラーに盾を投げ、盾はデビルドリラーを斬りつける。

デビルドリラー

「いったあ！」

ドリルは止まり、盾はメイメイのところへ戻ってくる。

そしてデビルドリラーはメイメイに向く。

デビルドリラー

「この小娘が！」

そしてたけしはデビルドリラーに向かって走り、剣を構える。

するとスターライザーの羽が赤くなり、デビルドリラーはたけしに振り向く。

たけし

「喰らえ！秘剣！超力ライザー！！！」

たけしはスターライザーでデビルドリラーを斬る。

デビルドリラー

「ギャアーーーー！！！！！」

するとドリルが真っ二つになる。

デビルドリラー

「ああ！私のドリルが！今回は見逃してあげましょう！」

そう言つてデビルドリラーは消える。

たけし

「ふう〜これでよし！」

メイメイ

「かつこいいよたけし！」

たけし

「そうか？」

すると夏候惇は剣を構える。

夏候惇

「貴様、何者だ？」

たけし

「俺は、大切な宝石を求め旅をする少年だ」

夏候惇

「何！？ならば・・・覚悟！」

夏候惇は斬りかかるが、たけしはスターライザーで防ぐ。

たけし

「おい！いきなりなんだよ！」

夏候惇

「問答無用！」

そして夏侯惇の斬撃を、たけしは防ぐのであった。

クリスタル4 星の剣スターライザー！（後書き）

今回登場したヒロインを紹介します。

メイメイ

CV 大久保藍子

モチーフ 『真・恋姫†無双』の明命

この物語のヒロインである。中国人であり、たけしの幼馴染である。三国志の小説を愛読しており、好きな武將は楽進である。中国拳法を習っており、強さはたけしの二番目。たけしに好意をよせている。猫好きであるが、たけしには打ち明かしていない。

クリスタル5 袁紹と勝負！？（前書き）

この回で感想が来なかったら打ち切り覚悟で書きました。

あと、斗詩のファンの皆様は注意した方がいいと思います。

クリスタル5 袁紹と勝負！？

たけしは、夏候惇の斬撃を防ぎ続けている。

だがこれが精一杯だった。

たけし

（くそお、あいつには隙が見えねえ、どうすりゃいいんだ？）

そう思いながら防ぎ続けていた。

夏候惇

「どうした！貴様は攻めてこないのか！？だったら終わらせてやる
！」

夏候惇は剣を振り上げる。

しかしたけしは、ある事を思い出す。

たけし

（はっ！確か師範は、剣を使った武術家の弱点は、攻撃してくる瞬間だと言ってたな）

そう思いながら、夏候惇を見る。

たけし

（丁度良い、だったら・・・・・・）

夏候惇

「終わりだ！」

そしてたけしは、夏侯惇にタックルする。

続いて前蹴りをし、ローリングソバットで吹き飛ばす。

夏侯惇

「貴様、この私に……」

たけし

「悪いな、俺が剣で攻撃するのは怪物しか攻撃しないからね」

夏侯惇

「こ、子供の分際でえー！！！！！」

するとそこに、馬に乗った曹操が現れた。

曹操

「そこまでよ、両者、剣をしまいなさい」

夏侯惇

「華琳様！」

たけし

「ああ！あの時の！」

曹操

「あら、また会ったわね、春蘭、剣をしまいなさい」

夏侯惇

「しかし！」

曹操

「春蘭？私に同じ事を言わせる気？」

そして春蘭は、剣をしまう。

たけし

「それより、賊退治は出来たのか？」

曹操

「ええ、陣営に戻ろうとしている所よ」

たけし

「そうなのか、俺はこの夏侯惇という人を怪物から助けたんだ」

曹操

「私の家臣を助けた事、礼を言うわ」

そして華琳達は、去っていった。

たけし

「ふう〜こりゃ大変だぜ。さてと、ここから早く離れようぜ」

するとメイメイは……

メイメイ

「たけし！さっきメイメイが働いた店で、『袁紹が赤く輝く宝石を手にしたっていう』噂を耳にした！」

たけし

「え？マジで！？」

これを聞いて驚くたけし。

たけし

「おいおいおい！それ本当か！？」

するとたけしはポケットからモビルクリスタルを取り出す。

モビルクリスタルは、早く光っている。

たけし

「という事は一つ目のクリスタルに近いつて訳か！」

メイメイ

「そういう事よ！」

たけし

「じゃあ今行かないと！太陽は待ってくれないぜえ——————！！！！！！」

そう言つて、街まで戻るたけしであつた。

メイメイ

「あゝん待つてよたけし」

後からメイメイがたけしについていく。

そして街に着き、たけしは袁紹の城に向かって走る。

たけし

「早くしないと明日までには間に合わないぜえ！」

メイメイ

「たけしゝもう少し待とうよぉゝ」

たけし

「何言ってるんだ！クリスタルは待っちゃくれないぜ！今日は絶対手に入れないと取り返しのつかない事になるぜ！これはチャンスだからな！」

メイメイ

「流石たけし！メイメイもたけしに着いていくよ！」

こうして二人は、休まずに走った。

そして城に着いた。

たけし

「さあて、クリスタルを手に入れないとな」

メイメイ

「そうだね！」

その頃、袁紹は……

袁紹

「ええ？またあの少年が？」

顔良

「はい、麗羽様に面会を申しておられるのですが……」

袁紹

「何故ですか？」

顔良

「何でも、麗羽様が持っていていらっしゃる『赤く輝く宝石』の事で話があるそうで……」

袁紹

「そうなんです？では、ここに連れなさい」

顔良は、すぐに部屋から出て、門へ向かった。

そしてたけしとメイメイは、袁紹の部屋へ連れられた。

袁紹

「竜崎さん？あなたは確か、赤い宝石を捜しているそうではありませんか？」

たけし

「そうだ、あれは危険なんだ。さあ、渡してくれ」

たけしはそう言うが……

袁紹

「ダメですわ」

そしてたけしはずっこける。

たけし

「何で!?!」

袁紹

「あれは私が見つけたのですから、あなたみたいな子供に渡す訳にはいきませんわよ」

たけし

「はあゝ……って！俺は子供じゃねえ！あのクリスタルは危険なんだ！渡してくれ！」

袁紹

「私がダメと言ったらダメですよ。と言いたい所ですけど……私達と勝負しなさい！」

たけしとメイメイは、これを聞いて驚く。

たけし

「は、はあ!?!勝負う!?!」

袁紹

「私達に勝てば、赤い宝石は渡しますわ。でも負けたら……」

たけし

「俺達は諦めてここから去れという事か。おもしれえ！その勝負！受けて立つぜ！」

こうして、袁紹とたけしの勝負？が始まる。

試合会場にて……

司会者

「さあ始まりました！天の身遣いの少年と優雅で華麗な袁紹様が！『赤い宝石』をかけて勝負です！」

たけし

「あはは、それはどうも」

司会者

「では最初は！知恵対決です！」

たけしとメイメイの前には、椅子とマジックハンドと吊るしてあるバナナである。

因みに文醜と顔良も同じである。

司会者

「天の身遣い？それとも暴君？な少年の竜崎たけしチームと知力36の顔良チームの対決です！」

たけし

「ちよつと待て！それとも暴君？っていうのは何だ！？俺は暴君じゃないぞ！」

司会者にツッコミを入れるたけし。

メイメイ

「うーん、これどうやるのかな」

たけし

「だったら俺に任せろ！」

たけしは椅子をバナナの下におき、乗り、バナナを取ろうとするが、届かなかった。

たけし

「取れねえ！何でだ！」

バナナが取れなく、イライラしているたけしに対し顔良達は……

顔良

「これ、こう使っくんじゃないかしら？」

そう言っで、椅子をバナナの下に置き、マジックハンドを持って椅子に乗るが……

たけし

「こうなりや俺の脚力で何とかするぜ！」

たけしは少ししゃがみ、サマーソルトキックでバナナを上上げる。

すると縄は切れ、たけしはうまく床に着地し、落ちてくるバナナを取った。

これを見た顔良と文醜は啞然とする。

文醜

「いや、何か力づくで取っているような……」

隣を見ると、顔良が頬を赤くしていた。

文醜

「おい斗詩！まさか、あのガキの事を……………」

顔良

「ふええ！？違うもん！何と言つかその……………」

司会者

「勝者！竜崎たけしチーム！」

文醜

「あれで勝ちい……………！？」

と司会者にツッコむ文醜であった。

たけし

「勝ちに勝ちだ。文句言うな」

文醜

「お前は強引過ぎるよ！」

二回戦の小豆運びは顔良チームが勝ち、三回戦のコスプレ対決はたけしチームが勝ち、四回戦の貝合わせは顔良チームが勝ち、勝負は夕方まで続いた。

そして最後の対決は……………

袁紹

「勿論、この白鳥のまわしをつけて女相撲ですわ！」

たけし

「!？」

たけしはこれに驚いて少し引く。

メイメイ

「ううゝそれだけはダメね……」

そしてたけしは、スターライザーを取り出し……

たけし

「おい、何でこんなに続くんだ？」

と袁紹に尋ねるたけし。

袁紹

「そ、それはその……」

たけし

「どうやら、隠し事をしていたようだな」

袁紹

「な、何の事ですか？」

たけし

「だったら、力づくで吐かせてやる」

そう言つて、黄色いクリスタルを取り出してスターライザーの星のエンブレムをケースのように開かせ、くぼみにクリスタルをはめ込

む。

スターライザーが電気を出す。

たけし

「喰らえ！秘剣！サンダーライザアーーーー！！！！！」

スターライザーを地面に刺し、電気は袁紹に直撃する。

袁紹

「キャア――！！！！！！！！！」

文醜

「ああ——麗羽様！斗詩！今すぐ助けに……」

その隣では、頬を赤くする顔良であつた。

顏良

「あれ、たけし君にやられたい……」

文醜

「え！？まさか斗詩……」

顔良の衝撃な発言に驚く文醜。

こうして袁紹は、黒こげになり、対決は幕を閉じた。

袁紹の部屋にて・・・・・

たけし

「はあ！？無いだとおーーーー！！！！！」

顔良

「それが、従妹の袁術様に渡したらしくて……」

たけし

「畜生！もっと早く……って！お前等が悪いんじゃないか！」

袁紹

「まさか、あの宝石にとんでもない力があるなんて知りませんでしたわ」

たけし

「だろお！？さっき見ただろ！？全く、こうなりや袁術の所まで言
つて『返せ！』って頼むしかないかあ」

袁紹

「なら、私はその手紙を書きますから。今夜はここで泊まりなさい」

たけし

「そうさせてもらうぜ」

こうして、たけしとメイメイは、袁紹の城で泊まる事になった。

翌日、袁紹から手紙をもらい、街から出るたけしとメイメイであった。

たけし

「ふう～袁術の所までかあ～すげえ大変だぜ」

メイメイ

「でも、メイメイはたけしと一緒になら何処へでも行けるよ」

たけし

「そうかあ？じゃあ一緒にだぞ？」

メイメイ

「勿論よ！」

そしてたけしとメイメイは、袁術の街を目指して行くのであった。

その頃、顔良は……

顔良

（ああ、たけし君行っちゃった……可愛かったのに……凶暴な所もかわいしいし、弟にしたかったな）

と思いながら門の前でたけし達を見送るのであった。

クリスタル5 袁紹と勝負！？（後書き）

たけし

「次回は、曹操の街へ！？楽しみにしてくれよ！」

クリスタル6 危険なクリスタル！？（前書き）

今回はキスシーンがありますのでご注意ください・・・

クリスタル6 危険なクリスタル!?

デビル帝国の城『デビルキャッスル』にて……

デビルカイザー

「うああー……………!!!」

デビルカイザーはたけしに邪魔をされた、叫びながら物を壊している。

????

「なあ、カイザー様に近付くのはやばくね？」

デビルカイザーを見て冷や汗を流している部下達の名はブラックスとサタンとグロッキーである。

ブラックスはデビルカイザーの忠誠心が強く、刃向かう者を蹴散らしてきた強者。

サタンは三人の中でバカだが、仲間想いでムードメーカー。

グロッキーは自分より強い者を求めて戦う事を望んでいる武闘派の部下である。

サタン

「それよりよくどうやってクリスタルを手に入れるんだ？」

ブラックス

「今それを考えてるんだ！サタン！」

サタン

「だったらよぉ俺の考えた作戦を思いついたんだが聞いてくれよ
おゝ」

グロッキー

「ほづ、ならば聞こうではないか」

サタン

「それはな……」

その頃、たけし達は……

街に続く森を歩いていた。

たけし

「ここから街に続くんだよね？」

メイメイ

「村の人達がそう言ってたよ」

たけし

「ふうん」

その時、たけしは横を振り向くと、女性が倒れている所を見て止ま
ってしまふ。

更に女性が倒れている地面では、血が広がっていた。

これを見たたけしは、冷や汗をかく。

たけし

「な、なあ・・・・・・・・あれは一体・・・・・・・・」

メイメイ

「まさか・・・・・・・・死体!？」

たけし

「よくあるサスペンスで、何者かに後ろから刺されたりするよな・・・・・・・・」

メイメイ

「もしかしたら後ろから岩とかでぶつけられたかもしれない!」

二人は恐る恐る近付く。

???

「大丈夫ですよ、その人は死んでませんから」

二人は少女の声がしたところに向く。

その少女は、頭に人形が乗ってあった。

たけし

「死んでないって、じゃあその血は・・・・・・・・」

???

「それは『鼻血』ですよ」

たけし

（は、鼻血だったのかよ……）

これを聞いて少し引いたけし。

そして場所を移し、たけしとメイメイは少女達と話し合っていた。

因みに倒れた女性の名は郭嘉と言い、少女は程イクという。

頭についている人形は宝慧という。

たけし

「で、郭嘉さんと程イクさんがあの曹操さんに軍師として仕えるってわけか？」

郭嘉

「そ、そうなのですが……」

たけし

「何で、鼻血を出したんだ？しかも大量に……（汗）」

すると郭嘉は顔を赤くする。

程イク

「妄想で鼻血が出ちゃうんですよ」

郭嘉

「こ、こら風！何を言って……」

そして郭嘉は少し焦る。

たけし

「そ、そうなんだ（妄想で鼻血が出るって、保健では習ってないなあ〜）」

メイメイ

「それで、何故曹操さんに？」

郭嘉

「それは、私達は文学と兵法を学び、その後は主を求める旅に出て、曹操様の噂を聞いて仕えたいと思い、こうして私達はその街に行く」と

たけし

「そうだったのか、俺は曹操に一度会ったぜ」

郭嘉

「ええ！？」

これを聞いた郭嘉は驚く。

たけし

「確か、『私の物になりなさい』っていわれたなあ〜」

郭嘉

「そ、曹操様の物に……ブハア！！！！」

郭嘉は鼻血を出す。

たけし

「ど、どうしたんだよ！？」

メイメイ

（た、たけし．．．郭嘉さんのツボを触っちゃったね．．．）

その後、程イクは郭嘉を介抱をし、街に向けて歩いた。

その物陰には、一人の少女がたけし達の様子を見ていた。

顔良

「ハア、ハア、ハア、たけし君を．．．たけし君を私の弟にしたい！そしてあんな事やこんな事をしたい！」

顔良だった．．．（汗）

どうやら独断で抜け出してたけし達のとをつけていたらしい。

顔良

「ちゃんと許可は得たわよ！（怒）」

は、はい．．．（汗）

顔良

「ああ．．．たけし君を私の弟にして永遠に暮らしたい！その為にはあのメイメイという女の子を引き離さないと．．．」

そして顔良は、嫉妬と黒いオーラを出しまくった。

たけし

「．．．．．（汗）」

メイメイ

「どうしたの？たけし」

たけし

「今なんかすつげえ寒気がしてきた」

街に着き、たけしとメイメイは宿を探し、郭嘉と程イクは曹操の屋敷へ向かった。

たけし

「郭嘉さんと程イクさん、大丈夫かな？」

メイメイ

「大丈夫だよ」兵法とか学んでいるし、きっと軍師になれるよ」

たけし

「だといいけどなあ」

すると兵士達が現れ、たけし達の前で止まる。

兵士

「君達が噂の天の身遣いか？」

たけし

「まあ、一応……」

兵士

「曹操様の命で、あなた方をお連れします」

たけし

「ええ？」

こうしてたけしとメイメイは、兵士の後について行った。

曹操の玉座の間にて……

たけし

（うわあゝすげえ緊張するゝ）

袁紹の玉座の間とは違い、早々の玉座の間では緊張するたけしであった。

曹操

「たけし？私の家臣を助けた礼は忘れてないわ」

たけし

「あの夏侯惇っていう人、どうしたんだろ？」

曹操

「春蘭は今、警邏に出かけたわ」

たけし

「そうなんだ（あの人にあって、もう一度戦いたかったのにな……）」

すると曹操は、たけしのポケットが光っている事に気付く。

曹操

「その光ってるもの？」

たけしはポケットからモバイルクリスタルを取り出し、曹操に見せる。

たけし

「これだ、このクリスタルが光っているっていう事は他のクリスタルに反応している。つまりここにクリスタルがあるって事だ」

曹操

「くりすたる？何それ？」

たけし

「今から説明をする」

そしてたけしは、曹操にクリスタルという物と、集めている理由を話した。

曹操

「ふーん、そう。でも信じがたいわね」

たけし

「だったら、持っているクリスタルを貸して欲しい」

曹操

「貸して欲しい？」

たけし

「いや、貸してください……（汗）」

曹操

「いいわ」

そして曹操はクリスタルを取り出し、たけしに渡す。

そのクリスタルは透明色であり、真ん中に『GO^{ジー・オ}』と書いてあった。

たけしはスターライザーを出し、星のエンブレムを開き、クリスタルのくぼみにはめ、閉める。

するとスターライザーから黒い電気が出る。

たけし

「な、なんだよこれ！？う、うわぁーーーー！！！！！」

黒い電気がたけしに流れ、たけしはそれに苦しむ。

たけし

「あぁーーーー！！！！！！！！！！！」

これを見た曹操とメイメイは驚く。

スターライザーのエンブレムが開き、クリスタルが飛ぶ。

同時にたけしは気絶する。

メイメイ

「たけし！たけし！」

曹操

（まさか、これほどの力があつたなんて……）

たけしはその後、開いている部屋で寝かされた。

デビルキャッスルにて・・・・・・・・

デビルカイザー

「ふふふふ、これはいい機会だ」

たけしの様子が写っている水晶玉を見て怪しい笑みを浮かべるデビルカイザー。

デビルカイザー

「流石はサタン、バカだと思ったがこれが狙いとはな。あのクリスタルの力を使った以上、あのたけしという少年のクリスタルの力が使えなくなる！」

そしてデビルカイザーは、高笑いをする。

その頃、たけしは・・・・・・・・

たけし

「ん？ここは・・・・・・・・」

メイメイ

「気が付いた！良かったよ！良かった！」

そしてメイメイは、たけしが目覚めた事に喜び、抱きつく。

たけし

「うわぁ、メイメイ」

メイメイは少し涙を流す。

たけしは立とうとするが、バランスを崩してメイメイと一緒に倒れてしまう。

メイメイ

「キヤア！」

たけし

「おわぁ！」

すると扉が開き、現れたのは郭嘉と程イクであった。

郭嘉

「たけしさん、具合は・・・！？」

程イク

「ほぉーう。お取り込み中でしたか」

郭嘉と程イクが見た光景は、たけしとメイメイがキスするところだった。

たけし

（やべえ！？っていつか郭嘉さんと程イクさんが来ちゃってるよ！？）

メイメイ

「んん、
チュクチュク、
レロレロ」

更にメイメイは舌を入れてたけしの舌と絡ませる。

郭嘉

「
で、
では、
」

程イク

「では、ゆっくり」

そう言って、二人は出て、扉を閉める。

メイメイはキスをやめ、たけしは頬を赤くする。

たけしは心にこう呟いた。

たけし

(どうしよう、メイメイとキスしちゃったあ！どうすりゃいいんだあ――！！！！！！？)

- と

そしてメイメイは・・・

メイメイ

（たけしとキスしちゃった。でも……それだけでも嬉しいよ……／＼／＼）

と心で呟いた。

この後たけし達は、曹操の玉座の間へ呼び出されたという。

クリスタル6 危険なクリスタル！？（後書き）

ジーン
GOクリスタルとは？

クリスタルの中でも最も危険なクリスタルであり、強大な力がある。使ってしまうと他のクリスタルが使えなり、使用者の身体に影響を及ぼす。

次回はサタンが・・・・・・お楽しみに。

特別編 たけしの家（前書き）

今回はテコ入れです。

特別編 たけしの家

たけしの家のリビングにて……

そこには、龍の骨とたけしとメイメイが座っていた。

それは何故かというと……

龍の骨

「うーん、このままだとヤバいな」

たけし

「何が？もしかして愛紗さんの料理か？」

龍の骨

「いや、違う」

メイメイ

「じゃああれかな？感想が来なくなっているからかな？」

龍の骨

「うう、まあそうだけどさあ」

たけし

「良い点と悪い点とか言ってくれないと物語が進まないんだよなあ」
「」

そう言って呑気にジュースを飲むたけし。

龍の骨

「あのさあ、真面目に考えようよ」

たけし

「真面目に考えろって言われても、結局は何も変わらないままじゃねえか」

龍の骨

「うう……」

たけし

「大体さあ！『ゾンビゲームBC』と『BSAA学園！』と『気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！』が高いってのにこっちは低いぞ！」

龍の骨

「それは……」

たけし

「これじゃあ低予算で作った作品みたいじゃねえか！」

メイメイ

「言われてみればそうだよな」

そして龍の骨の心にひびが入る。

たけし

「この作品にはインパクトとギャグが足りないんだよ！ほら、四話で顔良さんがキャラ崩壊しても全くかわらねえし、前回では俺とメイメイがキスしても変わらなかったし」

メイメイ

「そうだね、このままだと打ち切りになるよ」

龍の骨

「ま、まあそうだね……」

たけし

「大体お前『バイオ5』のガトリングマジニの姿をしていて『ギャグ』と『ぶっ飛んだネタ』というガトリングを放ってるくせにさ」

メイメイ

「やっぱり恋姫とオーレンジャーをクロスさせたところが失敗だったみたいね」

そしてまたたけしはジュースを飲む。

たけし

「シンプルすぎるんだよね、敵組織が、『デビル帝国』とか」

龍の骨は落ち込む。

たけし

「作者さ、どうした？」

龍の骨

「いいんだ、どうせこの小説は失敗だったんだ。いや失敗作だ」

たけし

「な、何言ってるの？」

これを聞いたたけしは少し冷や汗をかく。

龍の骨

「たけしを『気力少年ダイチ!』のもう一人の主人公する手もある。これで読者にも、竜崎たけしを解ってもらえる」

メイメイ

「さ、作者さん？」

龍の骨

「読者の皆様、今回でこの小説は打ち切りとします。この小説の主人公の竜崎たけしは、『気力少年ダイチ』のもう一人の主人公に・・・」

たけし

「ふざけんな!くらえ!秘剣!超力ライザアアア!!!!!」

たけしはスターライザーで、秘剣超力ライザーで龍の骨に喰らわす。

龍の骨

「グハア!!!!!」

メイメイ

「作者さんの根性を叩き直すね!」

そう言つて龍の骨にサークルディフェンサーを投げ、頭に刺さる。

龍の骨

「ギアアアアアアアア!!!!!!!!!」

たけし

「何が打ち切りだ！読みたくても読めない人だっているんだぞ！」

メイメイ

「幾ら感想が来ないからっていじけちゃダメね！書きたくても書けない人だっているんだよ！」

龍の骨

「はい、すみませんでした……」

たけし

「ったく、すぐ諦めんなよ。本当に」

龍の骨

「うう、そうですね……」

たけしと龍の骨とメイメイは、ソファーに座る。

龍の骨

「どうやらツッコミ役の人がいないとなあ」

たけし

「え？」

龍の骨

「ギャグが足りないのはそのせいだと思う」

メイメイ

「そうかあゝ悪側にもいるって訳だね」

龍の骨

「その通りだ」

たけし

「誰がツッコミ役をやるんだ？」

龍の骨

「そうだなあゝキャラは考えたんだけど……」

龍の骨はキャラ設定の紙を取り出し、たけし達に見せる。

そのキャラの設定は……

田村 幸一

イメージCV 後藤邑子

モチーフ 『爆丸バトルブローラーズ』の風見駿。

性格 普段は優しいのだが、怒ると怖い

零斗と同じ小学四年生の少年であり、幼馴染である。たけし達のボケをツッコむツッコミ役
ボクシングを習っている。

たけし メイメイ

「・・・・・・・・」

龍の骨

「どうだ？このキャラを次回に登場させるんだ」

たけし

「ま、まあいいんじゃないかな？」

メイメイ

「読者はどう思っかなあ？」

龍の骨

「大丈夫だ！この小説を信じようよ！」

たけし

「そうだな、次回から変わるからな！」

龍の骨

「それじゃあ、せーの・・・・・・・・」

たけし メイメイ 龍の骨

「『これから』も『たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！』を宜しくお願いします！！！！」

『特別編 たけしの家』完

特別編 たけしの家（後書き）

この文章で気分を悪くしてしまったら申し訳ありません。

良い点、悪い点を見つけて欲しいです。

但し、文句や悪口は受け付けません。

クリスタル7 守りたいもの（前書き）

今回はたけしが遂に…

キスシーンがありますのでご注意下さい。

クリスタル7 守りたいもの

曹操の玉座の間…

たけしとメイメイは正座しており、曹操の付近では夏侯惇と荀イクがいる。

曹操は普通の顔をしているが、実は怒っている。

曹操

「たけし、あなたの部屋でメイメイと接吻をしていたそうね？」

たけし

「？接吻て何だあ？」

たけしは首を傾げる。

メイメイ

「接吻というのはキスだよ」

たけし

「ああ、そうなのか」

曹操

「偶然とはいえ、接吻をした事に変わりはないわ」

たけし

「俺達をどうするんだ？」

曹操

「今回は見逃してあげる、けど行き過ぎれば…分かってるわよね？」

そして曹操はたけしに睨む。

たけし

「うう、行き過ぎないようにするよ」

旬イク

「あなた、意味分かってるの？」

曹操

「それで、そのクリスタルっていう力、危険なのは理解したわ」

たけし

「じゃあ信じてくれるのか!？」

曹操

「さっきのでは、信じ難いわね」

これを聞いたたけしは首が少し下がる。

たけし

「だったら見せてやるよ」

そう言つて、モバイルクリスタルを取り出し、上に上げる。

たけし

「モバイルアームズ！発動！」

モビルクリスタルは光だし、曹操達はそれに注目する。

だが…

モビルクリスタルの光が消えてしまう。

たけし

「あれ？」

メイメイ

「どうしたの？」

たけし

「ここで鎧が現れる筈なんだけど…モビルアームズ発動！」

しかし何も起こらなかった。

曹操

「どういつ事かしら？あれだけ言っておいて、私をからかう気なの？」

たけし

「待つてよ！本当に起きる筈だ！信じてくれよ！」

曹操

「でも、まだメイメイがいるじゃない」

そう言つてメイメイの方に向く。

メイメイ

「私ですか？」

曹操

「次、あなたが見せてみなさい」

メイメイ

「分かりました」

そしてメイメイは、サークルディフェンサーを取り出し、エンブレムをケースの様に開かせ、サンダークリスタルをくぼみにはめる。

するとサークルディフェンサーに電気が流れる。

曹操達はこれを見て驚く。

メイメイはサークルディフェンサーで防ぐような構えをし、電気はシールドのように丸く広がる。

曹操

「これなら、信じられるわね」

これを聞いたメイメイは表情が明るくなる。

曹操

「でもおかしいわ。メイメイが使って、たけしが使えないのはどうしてかしら？」

メイメイがクリスタルの力が使えて、たけしが使えない事に疑問に思う曹操であった。

旬イク

「華琳様、二人の方はどうしましょうか？」

曹操

「そうねえ。二人は宿に戻りなさい」

こうしてたけしとメイメイは、宿に戻った。

しかしたけしは使えなかった事にショックを感じたのか、表情が暗くなっている。

メイメイ

「たけし…」

たけし

（何で、何で発動しないんだ。何か問題があるんじゃないのか？）

クリスタルが自分だけ使えない事に悩むたけしであった。

メイメイ

「じゃあ先に行ってくるよ」

そしてメイメイは、先に食堂に行くのであった。

たけしはベッドに寝転がり、目をつむった。

たけし

「ここは？」

気がつくと、自然の森にいた。

たけしは起き上がり、歩き回る。

すると向こうから、赤いスーツを着た戦士『オーレッド』が現れた。

たけし

「お前は？」

オーレッド

「俺は、オーレッド。竜崎たけし」

たけし

「え！？お前は俺の名前を……」

オーレッドが自分の名前を知ってる事に驚く。

オーレッド

「何故お前は、クリスタルを集める？」

たけし

「それは、この世界からデビル帝国の支配を防ぐためだ！」

オーレッド

「それだけか？」

たけし

「え？」

オーレッド

「他にもあるだろう。周りをよく見てみる」

たけしは言われた通りに、周りを見渡す。

オーレッド

「これで分かったか？何の為に戦うのか、何の為にクリスタルを集めるのか、その答えは自分の中にある」

オーレッドは、背を向け、その場で行ってしまう。

たけし

「待ってくれよ……！！」

後を追うように走るたけし。

たけし

「待ってくれよ……！！俺はまだ知らないんだ！」

気がつくと、宿のベッドに座っていた。

たけし

（夢、だったのか？それにオーレッドが言っていた答えは俺の中にあるってというのは一体……）

そう思いながら、食堂へ向かうたけしであった。

とある森にて…

川の近くで、気絶している少年がいた。

???

「うう、ここはどこだ？」

少年は起き上がり、周りを見渡す。

???

「俺は確か、登校してた筈……」

自分の手を見ると、二本の斧を持っていた。

???

「何じゃこれはあ————————!!!!!!」

少年の叫びは、森に響いた。

曹操の玉座の間にて…

曹操

「ん？何か聞こえたんだけど、気のせいかしら？」

荀イク

「気のせいですわ。華琳様」

曹操

「そうね」

曹操の玉座の間では、たけしとメイメイが立っていた。

曹操

「あなた達を呼んだのは、他でもないわ。私のモノになりなさい」

夏侯惇

「なっ！」

荀イク

「華琳様！？」

これを聞いた荀イクと夏侯惇は驚く。

夏侯惇

「華琳様！メイメイはともかく、竜崎を入れるのはどうかと…」

荀イク

「それに、竜崎が天の身遣いだとしても、所詮ただの子供です」

たけし

「それは一体どういう事だ！」

荀イク

「あなた子供じゃない。それにあのクリスタルっていう力がなきや強くなれないんでしょ？」

たけし

「俺はクリスタルが無くたって！戦えるぜ！」

荀イク

「なら、ここにいる夏侯惇と戦って証明してみせなさいよ！」

これに驚く夏侯惇。

たけし

「ああ、また夏侯惇さんと戦ってみたいと思ってたからな」

夏侯惇

「そうか、だが私に勝てると思うなよ」

たけし

「望む所だ！！！」

こうしてたけしと夏侯惇達は、広場に移動した。

たけしはスターライザーを取りだし、夏侯惇は七星牙狼を構える。

合図は曹操がやる事になった。

曹操

「では、始め！」

たけしは素早く攻撃を仕掛け、夏侯惇は防ぐ。

そして宙返りを利用して攻撃し、夏侯惇はそれをかわす。

二人の戦いを見ている曹操達は……

曹操

「竜崎の方は、剣の筋は良いけど、無駄が多いわ」

荀イク

「いくら運動神経が良いからと言って、あの脳筋に勝てるとは思わないわ」

夏侯淵

「姉者、程々にな…」

程イク

「ほお～やりますね～竜崎君も～ぐう～」

程イクは寝てしまう。

郭嘉

「こら風！」

郭嘉は寝ている程イクを起こそうとする。

たけしは夏侯惇の攻撃を防いでいる。

たけし

「くっ！何て攻撃だ！」

夏侯惇

「どうした！得意の足技が出来ないと私に勝てないか！」

たけし

「そんなことねえ！足技が使えなくつたって戦えるんだよ！」

そう、曹操から足技を禁止されていた。

その為、足技が使えない。

しかしそれでもたけしは、夏侯惇の攻撃に屈しなかった。

そして二人の剣が交わる。

夏侯惇

「お前、中々やるな！」

たけし

「夏侯惇さんこそ！」

二人は少し距離をとる。

たけし

「はあ—————！！！！！」

夏侯惇

「うおお—————！！！！！」

二人の剣がぶつかり合い、たけしは夏侯惇に反撃する。

しかし、スターライザーは弾かれ、夏侯惇に喉元を向けられる。

曹操

「そこまでよ！」

曹操の合図で、試合は終了した。

たけし

「やっぱりええや」

夏侯惇

「当たり前だ！私は華琳様の為にあるのだ！」

たけし

「そ、そうか」

その時…

兵士

「ここにいたか、竜崎たけし」

全員は、向こうから来た兵士の方へ向く。

曹操

「何なの？」

兵士

「へへへへ…」

兵士の周りに、黒い気が竜巻のように出て、包んだ。

たけし

「な、何だ！？」

黒い気が晴れると、兵士はモヒカンでパンクファッションの男になった。

???

「俺はデビル帝国のサタン！竜崎たけし、そしてメイメイ！お前達が持っているクリスタルを渡して貰うぞ！」

メイメイはサークルディフェンサーを取りだし、夏侯惇は七星牙狼を構える。

たけしは地面に刺さっているスターライザーを抜いて構える。

たけし

「誰がお前に渡すかよ！！！！」

サタン

「おっと！そういえばお前、クリスタルが使えないんだよね？」

たけし

「それがどうした！」

サタン

「使えない理由を教えてやろうか？」

たけし達は、サタンに警戒する。

サタン

「お前が使ったG^{ジー・オ}Oクリスタルによって、使えなくなっただんだよ！」

これを聞いたたけしは、驚く。

サタン

「G^{ジョー・オ}Oクリスタルはなあ、強大な力が有りすぎて使った奴は他のクリスタルの力が使えなくなるんだよ！」

たけし

「そ、そんな……」

そしてたけしは膝をつく。

曹操

「そういう事ね、私が持っていたあのクリスタルは、他のクリスタルの力を使えなくさせる力があつたのね」

荀イク

「それを利用して、私達を潰すって訳ね」

サタンは黒い鎖鎌を取り出す。

サタン

「まあ、潰すのはついでだけだな。クロデビ！」

サタンの周りに、黒い霧が出てくる。

霧が晴れると、五十人のクロデビが現れた。

サタン

「さあ、死のパーティーの始まりだぜ！」

クロデビ達はメイメイ達にかかってくる。

メイメイはサークルディフェンサーを使ってクロデビ達を斬ったり、投げて攻撃する。

夏侯惇はクロデビ達をなぎ払い、攻撃をかわしている。

メイメイ

「たけし！」

メイメイはたけしのもとへ行く。

たけし

「メイメイ、俺はあんなクリスタルの力が使えない」

メイメイ

「何を言ってるの！たけしはクリスタルの力が無くたって戦えるよ！」

たけし

「でも！クリスタルの力がなきゃデビル帝国と戦えないじゃねえか！」

メイメイはたけしにビンタする。

メイメイ

「たけしのバカ！そんなんで挫けたら、戦えないよ！メイメイは、そんな力が無くても戦えるよ！」

たけし

「え？」

メイメイ

「守りたいものがあるから戦えるの!」

たけし

「守りたいもの?」

メイメイ

「だから、たけしも守りたいものがあるなら、戦って!」

そう言つて、メイメイはクロデビ達の所に行った。

たけし

「守りたいもの……」

荀イク

「キャアアーーーー!!!!」

荀イクの悲鳴に、たけしはそこに向く。

サタン

「へっへっへっへっへ」

荀イクはサタンに追い詰められている。

サタン

「よおよお、俺の女になれば命は助けてやるぜえ?」

荀イク

「私は華琳様の犬!誰があんたの女になりますか!」

サタン

「そうか、だったら死んでもらうぜえ！」

サタンは鎖鎌を振り上げ、荀イクは目をつむる。

その時…

荀イクが目を開けると、スターライザーを持ったたけしが、サタンの鎖鎌を受け止める。

サタン

「なっ！お前！」

たけし

「この娘に、手を出すな！」

そう言っつて、たけしは押し返す。

荀イクは頬を赤くする。

サタン

「お前、どうして…」

たけし

「俺は、例えクリスタルの力が使えなくても、守りたいものがあるなら戦うぞ！」

サタン

「何が守りたいものだ！お前は子供のくせに！」

たけし

「何い！俺の真の力を見せてやる！」

たけしはスターライザーでサタンに攻撃する。

サタンはたけしを抱え込み、膝蹴りをし、殴り飛ばす。

たけしはそれでも立ち上がる。

たけし

「俺は簡単にやられねえぞお——！！！！！！」

その時、ポケットからクリスタルが光だし、たけしはそのクリスタルを取り出す。

光っているのはGOKリスタルだった。

GOクリスタルは浮き、二つに分かれてたけしの手首に乗る。

光が晴れ、GOクリスタルがパワーブレスになった。

サタンと曹操達は驚く。

サタン

「おい、何だよ！何だよそれ！」

たけし

「オーレッドが言っていた他にもあるっていうのはこういう事か！行くぞ！超力変身！！！」

二つのブレスを同時に起動させ、左腕のブレスが光だし、網状のス
ーツが装着される。

たけし

「な、何だよこれ！うわぁーーーー！」

たけしが光だし、大人サイズとなる。

メイメイ

「たけし！」

サタン

「何だぁ！？」

光が晴れると、たけしは赤い戦士のオーレッドの姿になった。

メイメイ

「す、すごいね！」

たけしは自分の姿を見る。

たけし

（これは、オーレッドの姿、そうか、GOクリスタルは、その為に
俺にクリスタルの力を封じたんだな）

サタン

「変身したところで、俺に勝てると思うなよ！」

たけし

「今の俺はたけしじゃない。オーレッドだ!」

サタン

「お、オーレッドだと?」

オーレッドはクロデビ達に向かっていき、キングバトンで倒していく。

そしてキングブラスターを取り出し、他のクロデビ達を倒す。

こうしてクロデビ達は全滅した。

サタン

「くそお!ふざけやがって!」

鎖鎌を振り回して攻撃するが、オーレッドはかわしていく。

オーレッドはサタンに連続の突きを繰り出し、背負い投げをしてエルボードロップをする。

そして立ち上がり、スターライザーを構える。

サタンは腹を抑えながら立ち上がる。

サタン

「くそお!覚えてろ!」

そう言って、背を向けて逃げていった。

オーレッドは変身を解き、たけしに戻る。

するとたけしはフラつき、その場で倒れ、メイメイは駆けつける。

メイメイ

「た、たけし!？」

たけし

「ん?ここは、俺の部屋?」

気が付くと、たけしは自分の部屋のベッドで寝ていた。

するとドアが開き、メイメイが現れた。

メイメイ

「たけし!朝だよ!早く起きないと遅刻するって、もう起きてたの?」

たけし

「あ、ああ」

メイメイ

「そ、そうなの…」

するとメイメイは暗い表情になる。

たけし

「お、おい!どうしたらいいんだ!？」

メイメイ

「な〜んちゃってえ!」

そしてメイメイはたけしにキスをする。

たけし

「ん!?!?!?!?!」

メイメイ

「ん//////」

こうして二人は、目をつむった。

たけし

「んんレロレロ…」

????

「ん、レロレロ…」

目を開けると、曹操とキスしていた。

たけしは赤くなり、曹操から離れた。

たけし

「ななな何してるんですか!?!」

曹操

「まさか舌を入れるなんて、あなたも大人ね」

たけし

「いや、俺は舌を入れるつもりじゃ…」

曹操

「でも気持ちよかったんでしょ」

たけし

「は、はい…」

たけしは顔を赤くしながらも答える。

ドアの隙で覗いていたメイメイは…

メイメイ

（むう！メイメイが先だったのに！）

と頬を膨らましてヤキモチを妬くメイメイであった。

曹操

「それと、私の事は真名で呼ぶように」

たけし

「え？」

曹操

「私の真名は華琳よ。覚えておきなさい」

たけし

「は、はい」

こうしてたけしとメイメイは、袁術が治める街へ行くため、華琳の街の外に出た。

たけし

「何おこつてんだよ？」

メイメイ

「何でもないね！」

メイメイはまだ怒っているようだ。

たけし

「それよりさあ、メイメイの守りたい物って何？」

メイメイ

「メイメイは、家族と友達ね」

たけし

「俺は、生きるものすべてかな」

メイメイ

「え？」

たけし

「俺さ、生きるものすべてが、元気の源だ」

メイメイ

（たけし…）

すると…

たけし

「ん？」

向こうから荀イクがやって来た。

しかも笑顔で。

荀イク

「たけしくん」

たけし

「荀イクさん」

荀イクはたけしを引き寄せ、キスをする。

荀イク

「ん／／／／／」

たけし

「ん！？／／／／／」

これを見たメイメイは驚く。

二人は唇を離す。

荀イク

「たけし君、私の事は真名で呼んで」

たけし

「へ？」

荀イク

「私の真名は桂花」

たけしは少し戸惑う。

たけし

「え？華琳さんが好きなんでしょ？」

桂花

「華琳様は好きです。でも私、たけし君に助けられて好きになっちゃったの！」

これに驚くたけしとメイメイ。

桂花

「私決めた！たけし君のお嫁になる！」

たけし

「え、ええ――――！！！！！！」

たけしの叫び声が、外に響いた。

クリスタル7 守りたいもの（後書き）

ダイチ

「たけしいー俺より先に变身しやがってえー！……！！！」

たけし

「うわぁ！ってお前『気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行』のリュウ・ダイチじゃねえか！」

ダイチ

「まだ俺は变身してないのに……！！……！！！」

たけし

「恋姫無双編がまだ進んでないからだろお……！！……！！！」

メイメイ

「次回もお楽しみにね！」

クリスタル8 新たな仲間（前編）（前書き）

今回は戦闘はありません。

たけし

「え！？無いの！？」

クリスタル 8 新たな仲間（前編）

デビル帝国の城、デビルキャッスルにて……

デビルカイザー

「何がクリスタルの力を使えなくするGOクリスタルだ！嫌な予感がすると思ったら、お前が無様に負けた姿になっていた！」

デビルカイザーは、サタンの作戦が失敗した事に怒りをぶつけている。

サタン

「申し訳ございません、まさかあのGOKリストルがあんな力があつたなんて知らなくて……」

デビルカイザーは立ち上がり、サタンに近付いて顔面を蹴る。

デビルカイザー

「お前がそれを知っていたら、作戦は失敗せずに済んだ！」

怒りのあまりに顔面を蹴り続ける。

サタン

「申し訳ございませ……ぐはあ！」

デビルカイザー

「それにクリナーレは僕の命令無しに行ってしまったし、サタンは作戦を失敗するわけで僕は怒ってるんだよぉー！！！！！！！！」

そして黒い大斧を取り出し、振りかぶる。

サタン

「ひい・・・・・・・・命だけは・・・・・・・・命だけは・・・・・・・・」

必死に命乞いをするサタン。

だがデビルカイザーの目は、容赦は無い。

デビルカイザー

「・・・・・・・・罰だ」

大斧を盾に振り下ろし、サタンの叫び声は城中に響いたのは、言うまでも無い。

デビルカイザー

（全く、一刻も早くクリスタルを集めて全世界を支配しなくてはならないのに・・・・・・・・）

そう考えながら自分の部屋へ行くデビルカイザー。

デビルカイザー

（ならば、デビルドリラーを送りこもう。その時に奴等のクリスタルを奪えばいい）

デビルカイザーは不気味な笑みを浮かべながら部屋へ入った。

とある街にて・・・・・・・・

たけし

「ここが袁術の街か」

メイメイ

「でも人があまり通らないね」

袁術の街に着き、街の様子を見ると、活気があまり無い。

桂花

「ま、袁紹の従妹だからこういう事になってるんじゃないかと想像したけど、まさかここまでだなんて」

桂花は手を額に当てながら呆れている。

たけし

「何でだろ？」

この街の領主が良くない事に疑問を持ったけしであった。

そしてたけし達は、茶屋で一休みをする。

たけし

「何かこの街、人氣が少ないし、元気が無いみたいだ」

メイメイ

「まるで、あのデビル帝国に支配されたみたいね」

たけし

「いや、あいつ等の目的はクリスタルを集める事だ。その力で一気に支配するぞ」

そう言つて、たけしはお茶を飲む。

桂花

「そういえばたけし君、袁紹からもらった手紙があるじゃない」

たけしは「あ、そうか」と、懷から袁紹の手紙を取り出す。

メイメイ

「確かに手紙ね」

桂花

「じゃあ行きましょう」

繁盛は桂花が払い、茶屋から袁術の城へ行こうとするが……

男

「どけどけえーーーー！！！！！！」

向こうから剣と金が入った袋を持った男が走ってくる。

たけし

「何だ！？」

桂花

「どうやら盗んだようね」

たけしは構え、男が来るのを待ち、男はだんだん近付いてくる。

そしてたけしは男が自分の間合いに入ってきたタイミングを逃さず顔面にソバットキックをする。

喰らった男は倒れ、気絶した。

桂花

「しかも治安が悪いのね」

たけし

「こういう奴が出てきたのも、証拠だな」

メイメイ

「ほんとね！今から袁術の所へ行って文句を行って来るね！」

すると桂花は、メイメイを止める。

桂花

「あんた、何で感情的にいのよ。それじゃあ私達は牢屋行きよ！」

メイメイ

「じゃあどうすれば良いね！？」

するとたけしは、何かをひらめく。

たけし

「そうだ、いい事を思いついたぜ」

メイメイ

「え？」

桂花

「何を？」

たけし

「それはだな」

こうしてたけしのひらめきで、袁術の城へ行った。

玉座の間にて・・・・・・・・

???

「何々？美羽さんが持っている赤い石は、危険な力があり、それを回収するために竜崎達が旅をしているという。華麗で優雅な袁紹より」

たけしが渡した手紙を読み上げているバスガイドのような服装をしている青髪の女性と、袁紹の名を聞いた時に苦い顔をしている玉座に座っている金髪の少女がいた。

たけし

「そういう事なんだ。見た目は綺麗な石だけど、実は危険なんだ。袁術様、どうか我々に譲って貰えないでしょうか？」

すると袁術という少女は・・・・・・・・

袁術

「ダメじゃ」

これを聞いたたけしはずっこける。

袁術

「あの石は、わらわの物じゃ。他人に渡すわけにはいかんのじゃ」

メイメイ

「じゃあどうすれば渡すね!？」

袁術

「どんな方法でも、ダメなものはダメじゃ」

たけし

「俺を怒らせると、容赦しねえぞ！」

そう言つて、たけしはモビルクリスタルを取り出す。

これを見た袁術は目を細くする。

たけし

「モビルクリスタル発……」

発動する途中で、桂花に止められる。

桂花

「袁術様、こういうのはどうでしょう。私達はあなたがして欲しい事をすれば、赤い宝石をお譲りするというのは？」

袁術

「ダメなものはダメじゃ」

???

「ちよつと、美羽様」

すると青髪の女性が、袁術に耳打ちする。

袁術

「おお！流石張勳！で、お主等はわらわがして欲しい事をしてくれるんじやろ？」

そう言いながら、たけし達ににやける。

袁術

「では、わらわがして欲しい仕事を果たせば、赤い石を譲ってやらんでもないぞよ」

たけし

「本当か！？」

袁術

「本当じゃ、約束は守る」

桂花

「では、どんな仕事か、説明いただけますか？」

袁術

「それはじゃな」

夜になり、たけし達は街はずれの山を歩いていた。

何故かと言うと、袁術の領内にいる化け物を退治して来いとの事である。

たけし

「お堂をぶっ壊して別荘にするなんてな。何かおかしいと思っぜ」

メイメイ

「でも、メイメイはお化けとか幽霊とか苦手ね」

桂花

「情けないわね」

メイメイ

「情けないって……」

これを聞いたメイメイは少し凹む。

たけし

「悪い、俺もお化けとかそういうの苦手だから……」

桂花

「たけし君、怖くなったら私にしがみついてね」

笑顔をとけしに向ける桂花だった。

メイメイ

「桂花！それでたけしを自分のモノにしようと考えてるね！」

桂花

「はあ！？あんたはお化けとか幽霊とか怖いって言ってたじゃない！」

メイメイ

「でもたけしがいればメイメイは怖くないね!」

桂花とメイメイは、睨み合う。

たけし

「あ、着いたぞ」

桂花とメイメイが睨み合っている内にお堂に着いた。

たけし

「ここが、お堂か」

メイメイ

「な、何かきそうね……」

すると、不気味な音がし、扉の隙間から何か光り出す。

たけし

「な、何だ!？」

たけしは少し後ろに下がり、スターライザーを取り出して構える。

メイメイはサークルディフェンサーを取り出して構える。

その時、扉が開き、光の化け物が現れる。

たけし

「な、何だぁーーーー!!!!!!」

メイメイ

「ひいーーーー！！！！怖いねーーーー！！！！！！」

二人は思わず叫ぶが、桂花は驚きを見せない。

たけしは怖さで混乱しているのか、サンダークリスタルを取り出してスターライザーに取り込み、秘剣サイダーライザーを化け物に放つ。

しかし電気は化け物から両方に別のところに別れる。

????

「うわぁーーーー！！！！！！」

すると子供達の叫び声が聞こえ、電気は収まる。

たけし

「あれ？今、声しなかった？」

たけしは首を傾げる。

メイメイ

「うーん、確か男の子の声がしたね」

たけし達は叫び声がした所に行く。

たけし

「な！？ドラム缶！？しかもほら貝い！？」

気絶している少年の周りにあるのは、一個のドラム缶らしき物とほ

ら貝だった。

桂花

「あの化け物は、作り物だったのよ」

たけし メイメイ

「「え!?!」」

出てきた化け物が作り物だと知り、驚く二人。

桂花

「光るもので出来た布と、木で作られたらしいわね」

たけし

「という事は、このドラム缶っぽい物とほら貝の意味は!?!」

桂花

「これで音を反響させて化け物がいると思わせたようね」

たけしとメイメイは、少年を睨む。

その後、気絶した少年達をお堂の前に集め、正座させた。

たけし

「全く、恥ずかしくないのか!?!こんな事をして!」

かなり怒っている様子である。

たけし

「何でこんな事をしたんだ?悪戯にも程があるぞ!」

少年

「悪戯なんかじゃねえ！」

たけし

「じゃあ何なんだよ！悪戯じゃなきゃ何なんだよ！」

???

「待てよ」

するとお堂から、二人の少年が現れ、たけしは驚愕する顔をする。

たけし

「お前等！まさか……」

???

「その通りだ。竜崎たけるだ」

???

「そして俺は田村幸一だ」

竜崎たけると名乗る少年と、田村幸一と名乗る少年に、更に驚愕な顔をした。

クリスタル8 新たな仲間（前編）（後書き）

次回はたけし達とたけると幸一が怪人と戦います。

クリスタル9 新たな仲間（後編）（前書き）

桂花

「そういえば、たけしって怒るとどうなるのかしら？」

メイメイ

（ま、不味いね・・・たけしが怒るとすごく怖くなるね）

メイメイは大汗を流していた。

桂花

「?どうしたのよ？」

クリスタル9 新たな仲間（後編）

幸一とたけるは、たけし達をお堂の中に入れる。

お堂の中には、子供達だけいた。

たける

「このお堂には、両親が賊に殺された子供や、橋に捨てられた子供がいたんだ」

たけし

「そうなのか？」

幸一

「このお堂のお陰で子供達は助かった」

たける

「ある日、袁術という領主がここを取り壊して別荘にすると聞いてな」

たけると幸一は暗い表情になる。

幸一

「それで、俺達が考えて、領主の兵士を追っ払ったんだ」

たけし

「そうか、ここを取り壊して別荘にするなんて、どうかしてるぜ！」

子供達のいるお堂を取り壊し、別荘にする袁術に怒りを燃やすたけ

し。

たける

「そうだ、たけしとメイメイは何でここに？それに隣いる人は？」

たけるが問うと、たけしは向く。

たけし

「ああそうだった。実はな……」

たけしは、一刀にクリスタルを集めるよう、恋姫無双の世界に飛ばされ、メイメイも同じく飛ばされ、袁紹の街で再会した。

更に曹操の街で桂花と出会い、共に旅をする仲間となった事をたけると幸一に話した。

たける

「お前もか！」

たけし

「え！？」

たける

「実は俺、一刀という人に頼まれてこの世界に飛ばされたんだ！」

幸一

「因みに俺も」

たけし

「おいおいおいおい、ビックリだぜ！」

たける

「俺もビックリだぜ！」

幸一

「という事は俺らもう仲間!？」

たけし たける 幸一

「「「イエーイ!!!!!!」」」

三人はハイタッチしている後ろでは、メイメイと桂花は子供達と遊んでいた。

こうしてたけし達はお堂で泊まる事になった。

翌日……

一人の少年が、石を重ねたお墓の前で泣いていた。

そこにメイメイがやって来て、慰めようとする。

メイメイ

「泣いてるの？」

少年

「泣いてなんかねえよ」

メイメイ

「それ、お墓」

少年

「俺達の親は死んでるけど、この墓の下にはいないんだよ。だから皆でここにしようって」

少年がメイメイの方へ向くと、近くにあった花を持っていた。

メイメイ

「この花をお墓の前に置いたら、両親は喜ぶと思うよ」

すると少年は頬を赤くする。

少年

「女みたいじゃねえか」

そう言つてメイメイが持っている花を受け取り、お墓の前に置いた。

その時……

???

「ふふふ、お墓の前に花を置くとは……」

メイメイと子供は後ろを振り向くと、デビルドリラーとクロデビ達
がいた。

メイメイ

「お前はデビルドリラーね！」

デビルドリラー

「あの憎き竜崎たけしはどうしたんです？」

メイメイ

「お前みたいな弱い奴がたけしの相手は勤まらないね！メイメイが相手ね！」

サークルディフェンサーを取りだし、構えるメイメイ。

そして少年は逃げる。

デビルドリラー

「ほほう、私では相手が勤まりませんか？ではその台詞、そっくりそのまま返してあげましょう」

後ろにいるクロデビ達は、槍を構える。

その頃、たけし達は……

たけし

「何だ？」

ポケットから赤く点滅するように光っており、それを取り出すと、モビルクリスタルが赤く点滅していた。

たけし

「これは……まさかデビル帝国か！？」

モビルクリスタルが赤く点滅するという事は、敵が来ている事に反応をしているというのを示している。

たけし

「点滅してるってことは、この近くにデビル帝国の奴等が来てるっ

てことか!」

たける

「えっ! 来てるのか!？」

これを聞いて驚き、たけしの元へ行くたける。

桂花

「ということはメイメイが危ないわ!」

幸一

「行くしかねえって事か!」

たけし

「だな! 行くぞ皆!」

たけしとたけると幸一と桂花は、メイメイの所へ行った。

その頃、メイメイは・・・

メイメイ

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

メイメイは服がボロボロになっており、クロデビ達は半分いた。

デビルドリラー

「もう限界ですか?」

メイメイ

「まだまだだね!」

デビルドリラー

「しかし疲労しているようですが、果たして持つでしょうかねえ？」

クロデビ達はメイメイにかかり、メイメイはサークルディフェンサーで防ぐ体勢を整える。

たけし

「秘剣！超カライザー！！！！」

突然たけしが現れ、超カライザーでクロデビ達を斬る。

たけし

「大丈夫か！？」

メイメイ

「大丈夫ね！」

たけると幸一がやって来てたけしとメイメイはデビルドリラーに向く。

たけし

「お前、デビルドリラーじゃねえか」

デビルドリラー

「久し振りですねえ竜崎たけし君」

たけし

「ドリル直ったんだ」

デビルドリラー

「ええ、あなたを殺す為に」

クロデビ達はたけし達を囲む。

デビルドリラー

「大人しくクリスタルを渡しなさい。そうすれば命は助けてあげますよ」

たけし

「それは出来ないなあ、どうせお前ら嘘つくし」

デビルドリラー

「そうですか、クロデビ、やりなさい！」

クロデビ達は一斉にかかり、たけるは三角形型のトンファー『デルタトンファー』で倒し、幸一は長方形型の斧『スクエアクラッシュャー』で倒す。

メイメイはサークルディフェンサーで体当たりをし、投擲にして倒し、たけしはスターライザーで斬り倒してる。

たけし達が戦っている所を気の陰で見ている桂花。

桂花

（たけし君達が戦ってる。でも私は軍師、戦える力が無い）

そう思いながら胸に手を当てる。

桂花

（私は戦いたい！たけし君達の力になれるなら・・・）

すると目の前に黄色の光の玉が現れ、桂花は驚く。

桂花

（これは一体・・・）

黄色の光を掴み、突然光が二本のヌンチャク『スティックバトン』に変わった。

たけしは一体のクロデビを斬り倒す。

その時、後ろから槍を持ったクロデビが攻撃しようとする。

しかし、何かに吹き飛ばされる。

たけしは振り向くと、スティックバトンを持った桂花がいた。

たけし

「桂花！？」

桂花

「私も戦うわ！この世界を守るために！」

たけし

「桂花・・・分かった！一緒に戦おうぜ！」

たけしはクロデビ達の方へ走り、桂花はバトルスティックで向かって来るクロデビ達を倒す。

こうしてクロデビ達は全滅し、デビルドリラーはたけし達に向く。

デビルドリラー

「成る程、五人で私を倒すというわけですか？」

たけし

「それは違うぜデビルドリラー、お前の相手は俺だ。モビルクリスタル発動！」

モビルクリスタルを上挙げ、光り出す。

そして光は鎧に変わってたけし装着し、光が晴れ、超力タケシとなった。

デビルドリラー

「お、お前は！？」

超力タケシ

「超力タケシ！オーレ！」

メイメイ

「これがモビルクリスタルの力ね……………」

たける

「始めて見たぜ」

幸一

「すげえ……………」

桂花

「ああ〜たけし君カッコいい〜」

一人除いてそれぞれ驚きを見せた。

デビルドリラー

「そんな鎧を着けて、私に勝てると言っのか!?!」

超力タケシ

「ああ!勝てるさ!いや勝つさ!」

スーパークラウンソードで攻撃し、デビルドリラーは攻撃を防ぐが、少しずつダメージが入る。

デビルドリラー

「これがモビルクリスタルの力ですか!?!」

超力タケシ

「まだまだこれからだ!」

デビルドリラーを蹴り、構える。

超力タケシ

「ウイングヘッドアウト!」

掛け声により、ウイングヘッドは外れる。

デビルドリラー

「おのれえ〜!!!」

右肩についているロケットランチャーを超力タケシに向ける。

超力タケシ

「グラビトンヘッドチェンジ！」

掛け声でグラビトンヘッドは装着され、デビルドリラーはミサイルを放つ。

超力タケシ

「レオンパンチ！」

超力を拳に集中させ、ミサイルを破壊した。

デビルドリラー

「な、な、何ですかあれは！？」

デビルドリラーは慌てふためき、超力タケシはにやける。

超力タケシ

「グラビトンヘッドの力はこれだけじゃないぜ！超力レオンビーム！」

額から過重力ビームを放ち、デビルドリラーを押し潰す。

ビームを止め、デビルドリラーは立ち上がる。

するといつの間にか超力タケシはホーンヘッドに装着していた。

超力タケシ

「さあいくぜ！」

デビルドリラーを掴み、持ち上げて投げ飛ばす。

デビルドリラー

「うわぁーーーー！！！！！！」

背中を叩きつけ、ホーンヘッドの角の先から電気の球が出来ていた。

超力タケシ

「痺れるけど我慢しろよ！超力タウラスサンダー！！！！」

一万ボルトの電撃を浴びせ、デビルドリラーは悶える。

超力タケシ

「更に行くぜ！ホーンヘッドアウト！バルカンヘッドチェンジ！」

ホーンヘッドは外れ、バルカンヘッドが装着される。

デビルドリラー

「ぐう……ふざけたマネをおーーーー！！！！！！」

叫びながらドリルを回して走り、バルカンヘッドのバルカン砲はデビルドリラーに向けられる。

超力タケシ

「超力ドクバルカン！！！！！！」

バルカン砲が放たれ、デビルドリラーは直撃を受けて転ぶ。

デビルドリラー

「くっ……おのれえ……」

超力タケシ

「あのドリルが面倒になったな、バルカンヘッドアウト！キャノンヘッドチェンジ！」

バルカンヘッドが外れ、キャノンヘッドが装着される。

超力タケシ

「それでも喰らえ！超力モアキャノン！」

頭に付いているキャノン砲が放たれ、デビルドリラーのドリルは碎けた。

デビルドリラー

「ギャアーーーー！！！！私のドリルがぁーーーー！！！！！」

超力タケシ

「トドメだ！キャノンヘッドアウト！ウイングヘッドチェンジ！」

キャノンヘッドが外れ、ウイングヘッドに装着され、スーパークラウンソードを持った。

超力タケシ

「クラウンファイナルクラッシュ！」

光り出したスーパークラウンソードで斬り、デビルドリラーは断末魔を上げながら爆発した。

変身が解き、メイメイ達はたけしの所へ走る。

メイメイ

「たけし〜！」

メイメイは抱きつき、たけしは顔を赤くする。

メイメイ

「凄かったね！凄かったね！」

たけし

「そ、そうか？」

桂花

「コラ〜！たけしから離れなさい！」

メイメイ

「嫌ね！たけしはメイメイのダーリンね！」

桂花は引き離そうとするが、メイメイは離れない様子。

それを遠くから見ていたけると幸一は見守っている。

その後たけし達は、袁術の所へ行くのであった。

デビル帝国の城『デビルキャッスル』では……

カイザーデビル

「デビルドリラーがやられたか……」

たけしとデビルカイザーの戦いを水晶玉で見ていたカイザーデビル。

カイザーデビル

「だが、このままでは世界を支配する野望が程遠くなる」

このままでは不味いと思い、腕を組む。

カイザーデビル

「遂にアレを出すか」

そう言つて玉座から離れ、部屋を出た。

屋敷の謁見の間にて……

袁術

「おお！それじゃあ化け物は倒したそうじゃな！」

桂花

「それが、止めを刺そうとしたのですが、光となって消えました」

袁術

「消えおつたのか」

化け物が消えたことに少し驚く袁術。

たけし

「化け物が生まれるのは、人の負……」

袁術

「人の負？なんじゃそれは？」

たけし

「どうして化け物が生まれるか、知ってますか？」

袁術

「？わらわは知らんのじゃ！」

たけし

「つまり、自分のやっている事が民を苦しませてるんですよ」

袁術

「なぬ！？どどういう事じゃ！？」

たけし

「自分では知らなくても、受けてる人は誤魔化せないんですよ」

そしてモビルクリスタルでスーパーク라운ソードを取り出し、手に取る。

メイメイ

「たけし！？」

幸一

「お前何考えてんだよ！？領主様だぞ！？」

たけし

「民達の苦しみ、子供達の居場所を奪われると聞いて抵抗した気持ちを思い知れえー！！！！！！」

スーパーク라운ソードを投げ、袁術は恐怖のあまりに目を瞑る。

しかしスーパーク라운ソードは袁術の足元に刺さっていた。

張勳

「美羽様、あの男の子はかなり怒ってます。ここは涙目になって見逃してみらえば良いんです！」

袁術

「おおそうであつた」

涙目になり、たけしは動きを止める。

袁術

「お願いじゃあゝ見逃してたもゝ」

しかしたけしはスターライザーを取り出し、振り上げようとする。

袁術

「ひいーーーー何故じゃ！？何故なのじゃあ！？」

たけし

「俺はそんなんで許す男じゃねえんだよ」

たけしは袁術に睨み、張勳は慌てふためく。

袁術

「分かった！分かったのじゃ！赤い石をお主にやる！悪くならろう？」

たけし

「足りねえんだよそんなじゃ！やるべき事あんだろっが！」

袁術

「ひいーーーーー七乃おゝ助けてたもおゝ」

しかし張勳は恐怖のあまり、氣絶した。

桂花

「たけし君って、怒るとああなるの？」

メイメイ

「たけしは昔から怒るの抑えたね、でも袁術がたけしを怒らす行為をしたからああなったね」

たけしを怒らすような行為をしないと心に誓ったメイメイ達であった。

翌日、袁術はたけしが怒った姿が怖かったのか、子供達に孤児院を建て、民への施しをし、年貢を下げたという。

因みに赤いクリスタルはたけしに渡したという。

たけし達は江東行きの船に乗り、たけしは赤いクリスタルを眺める。

たけし

「ひゃっほゝゲットしたぜえゝ」

メイメイ

「もう、たけしったらやり過ぎね。女の子には優しくしないと嫌われるね」

たけし

「す、すまねえ、袁術のやり方が許せなくて」

たける

「そこがお前なんだよなあ」

幸一

「同時に良い所でもあるんだな」

桂花

「でもね、たけし君、怒るときは程々にね」

たけし

「はい、以後気をつけまゝす」

こうしてたけし達は笑い合った。

クリスタル9 新たな仲間（後編）（後書き）

次回！

江東に着き、たけし達はモバイルクリスタルが反応した場所へ行く。たどり着いた先には孫策の屋敷だった。争いの好まない孫権に出会い、たけしは孫権の優しさを知ることになる。

次回『クリスタル10 心優しき虎』

デビル帝国のキャラ設定（前書き）

今回はデビル帝国キャラと戦闘員を紹介します。

デビル帝国のキャラ設定

デビルカイザー

イメージＣＶ 黒河奈美

モチーフ 『鉄拳シリーズ』 デビル仁

デビル帝国の皇帝であり、クリスタルを集めて外史と現実世界を支配を野望に抱く少年。傲慢で我が儘であり、部下を振り回す。自分の作戦、または部下の作戦が失敗すると部下を巻き沿いにして暴れる。武器は大鎌『デビルデスサイズ』

クリナレ

イメージＣＶ 緑河光

モチーフ 『恋姫†無双』 左慈

デビル帝国のクロデビ部隊小隊長、赤髪に黒い革コートを着ているのが特徴。デビルカイザーの我が儘に振り回されてる苦労人。現在はクリスタルを集めに外史にいる。

武器は南海霸王をモチーフとした剣『ダークソード』（但し剣身は黒色）

ブラックス

イメージC V 梶裕貴

特徴 髪は逆立っており、左頬に切り傷の痕がある。黒い軍服を着ている。

デビルカイザーに忠誠心がある幹部。冷酷で非情であるが、仲間思いの所がある。武器は斧槍『ダークネスハルバード』

サタン

イメージC V 乃村健次

特徴 黒髪のアフロヘアにパンクファッション

デビル帝国の幹部だが、幹部のなかで一番バカであり、ムードメーカーである。そのせいか作戦が失敗し、いつもお仕置きを食らっている。武器は鎖鎌『チェーンデスサイズ』

グロッキー

イメージC V 安元洋貴

特徴 スキンヘッドで、闘牛と思わせる鎧を着ている。

デビル帝国の幹部。幹部の中では力持ちであり、東京タワーを持ち上げるほど。自分より強い者を求めている。武器は鉄球『デビルボール』

クロデビ

モチーフ 『超力戦隊オーレンジャー』 バー口兵

デビル帝国の戦闘員。主に戦闘や運搬をしている。デビルカイザーの八つ当たりの対象になっている事もしばしば。

デビル帝国のキャラ設定（後書き）

次回は本編となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7411p/>

たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！

2011年10月7日03時16分発行